こゝろの記

ル 3
3257

門 ル 3 號 3257 巻
門 ル 名4 號 1399 巻

# 岐蘇路記

此書は江戸より武蔵上州信濃美濃近江五ケ国乃名所旧跡を記す東山道は中山道下冊は信濃美濃近江の事は名所
に至るまで是をあらはす又東山道記とも云なり

貝原先生著

平安書林 正寶堂 蔵版

圖書

東山道西帰之記序

貞享乙丑乃暮つ方武城より西
へ帰らんとせしに老の身ハ又東よ
遊びんも定めなけれハ此度ハめくれ
押ましき越にゆく者の轅を北り
とほくまつ日光山にまうのほ
りてそれそれをおかミ御社を
伏拝みまいらせし 神威乃ありかた

明治 購求

よしゆ御山ありて御山宮作のかんがば
よりのふみぞきこえてちぎきたりしこれ
ふりにさかひりやうれ拙き筆まい
真かきいしとも志佐さん事いと
むかしこけまいもしね室乃八嶋
にまより足利の学校よ傳へで佐
野天明をすれ妙義のをのろう
よし嶽をこえ冬かりの間よ浅間が



嶽をちゝくはき路佐ひよ碓氷路
をこえ険棧と行るく摩裟剣を出ろ
ちはして美濃路よりり越路をへ
まくゆしき傍にて不破乃関より右
みさしそ北よゆき伊吹山の余
湖の海をながらけ柳が瀬刀祢をへ
て越前乃敦賀よいてり金が崎よ
出くらき浦乃海をかきらき浦の宮

を伏見ゝ末乃日山城庭よ見わう
ら山城こゝえ近江の貝津れ浦ゟ出
湖水の色越ともわど川ゆう越乃
妻比良れ湊堅田の浦ま野の入江
坂本大津をへて京よ入ぬこゝえぬ
間て人はてよ乃ゝ関まうりしれか
うるう隣いしき名勝の地をとまあめ
こりゆくまて見ん侍るすいく拾し何



あなふつきし山ぬしくつよ見ゆ入民の屋
どころ於すう小勢つぐれる両く城も
ひらう遠くあくられゆきでおきつ白
浪の立まうぬくきおそれりなく見ゝ
成ゑもくさく拾りてき佳境と同
をゆしぬまうれおがめゆく道すうしき
乃未陀ろこまれと北土みちうさし路
おもしいは気候ゆそくして桃李たゝし江

白のおさらにうるハしくみん酒多し
いかにへ乃人〳〵一日の楽(セウ)にあそんて一日乃
神仙となるといふハこゝろおもかれ
なんのけりまても浮世わすらるも身はなく
て佳境(カケウ)とるありなくいふすわれぬ生(イ)
きそ尭舜(ギヤウシユン)の仁にあらく寂寞(シヨウ)の遊
あそおもすそとゆるりと東坡がいふか
ごとく　大君の御めぐみにより天平

乃世にせよ徒然を紛らはせて筆つく紀
てなしめるみな遊ハ其一時乃たのしみのミ
には身をわするゝ酒くおしくれにそれ
ありさ麻をとい中まハ人まのあたら
みんなむ紀しておなし紀ゆすハ出てくる
まる行(ゴキヤウ)ふてかさ竹く行(キ)くへき所に
しあら孫八日くれるとある村里のあり
さ蔵とのたてすまひ川乃流遠図く

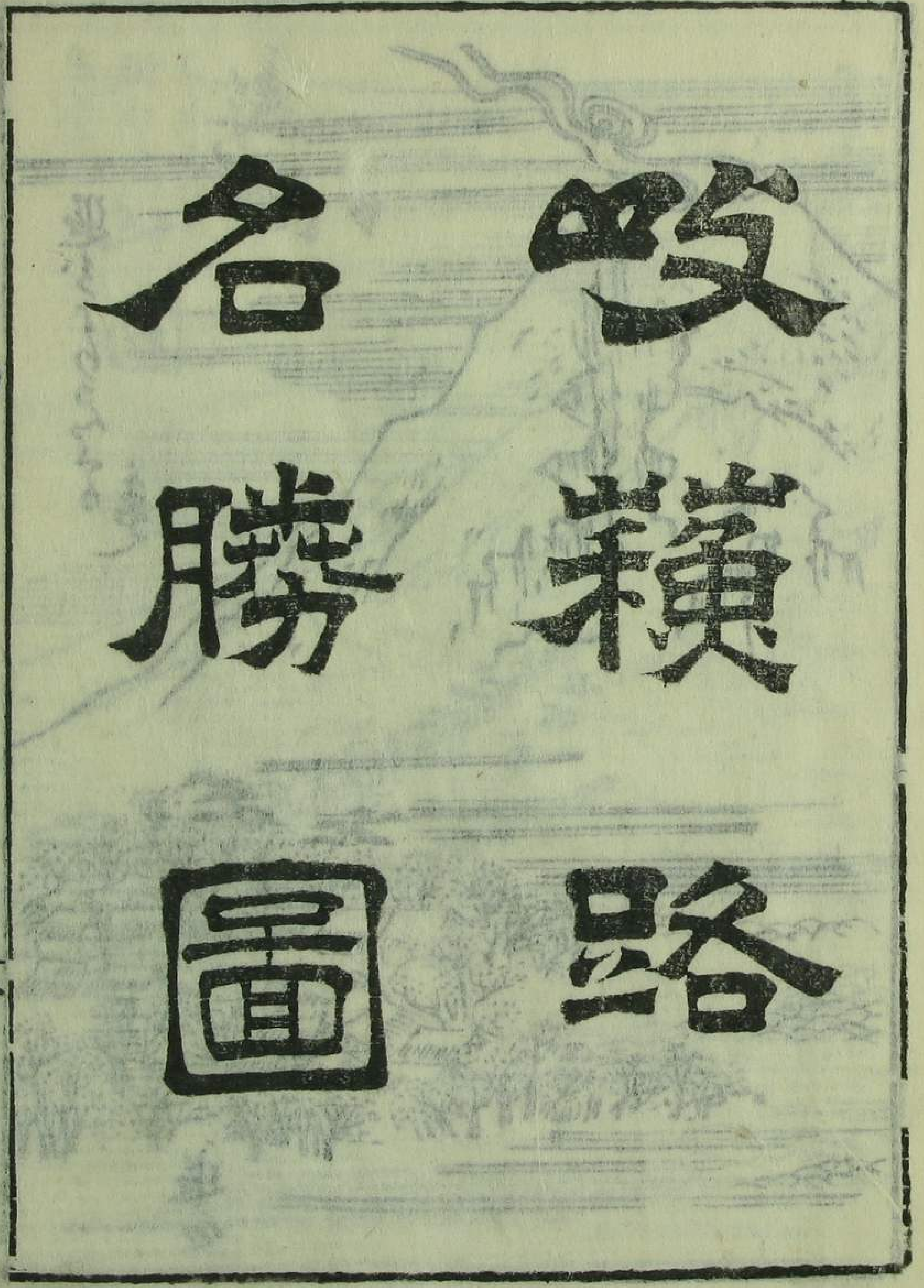
斯くの佳系たりし人ゝはよきうらひ
きくれ給しく道行ずりにおろく
書よめて後乃ちいまよきんさめ又此後
行く人のみちしるべよりありけんり
とて長き道と麓き筆にまうせ妄
み説しくりぬそ後は平安城の書林
柳枝新洲紀行を梓よ亡り行りんと
ろ入りまどりよ此紀ハ昔彼道とゑり

し湖路花村童の助くたくし倍肇よ岡
すすかりあれハまゆへふ事官あん屯し
ろめてしりしハ往たりくめんつしたる君
乃かん給ひんもかくしけなし又世の人了
あまりくみぎんもおわけありれハ為ゐ
徐へりしにまろれもしあ始きまあさ
くそさつまくゆりぬりしくハ東ら道の
すまよくまれしん人へありて此紀の

あやまりをゆるされ正し給ひてよ
幸甚しからん

寶永六年孟春の日

益軒貝原篤信記

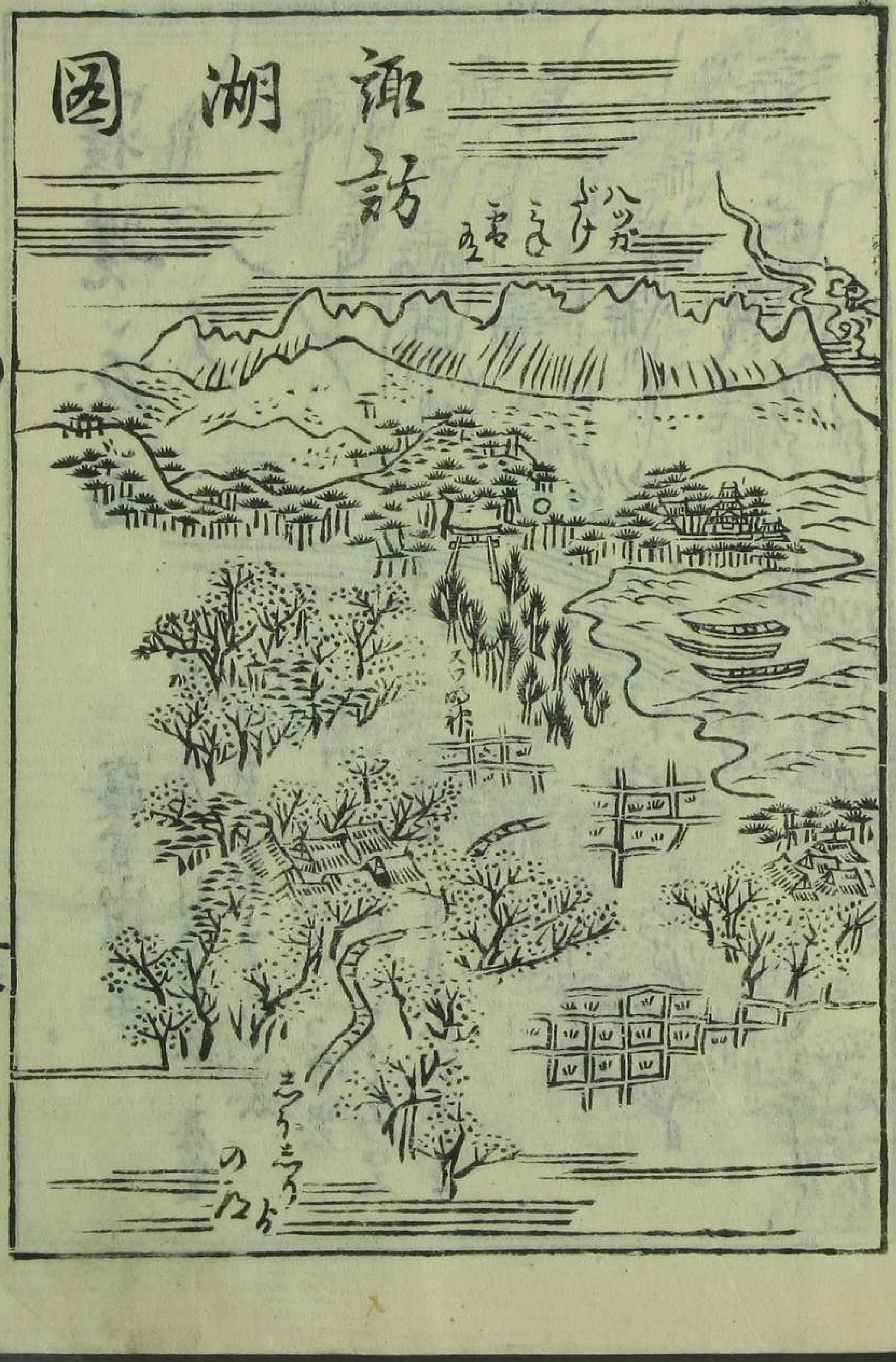


# 岐蘇路名勝圖

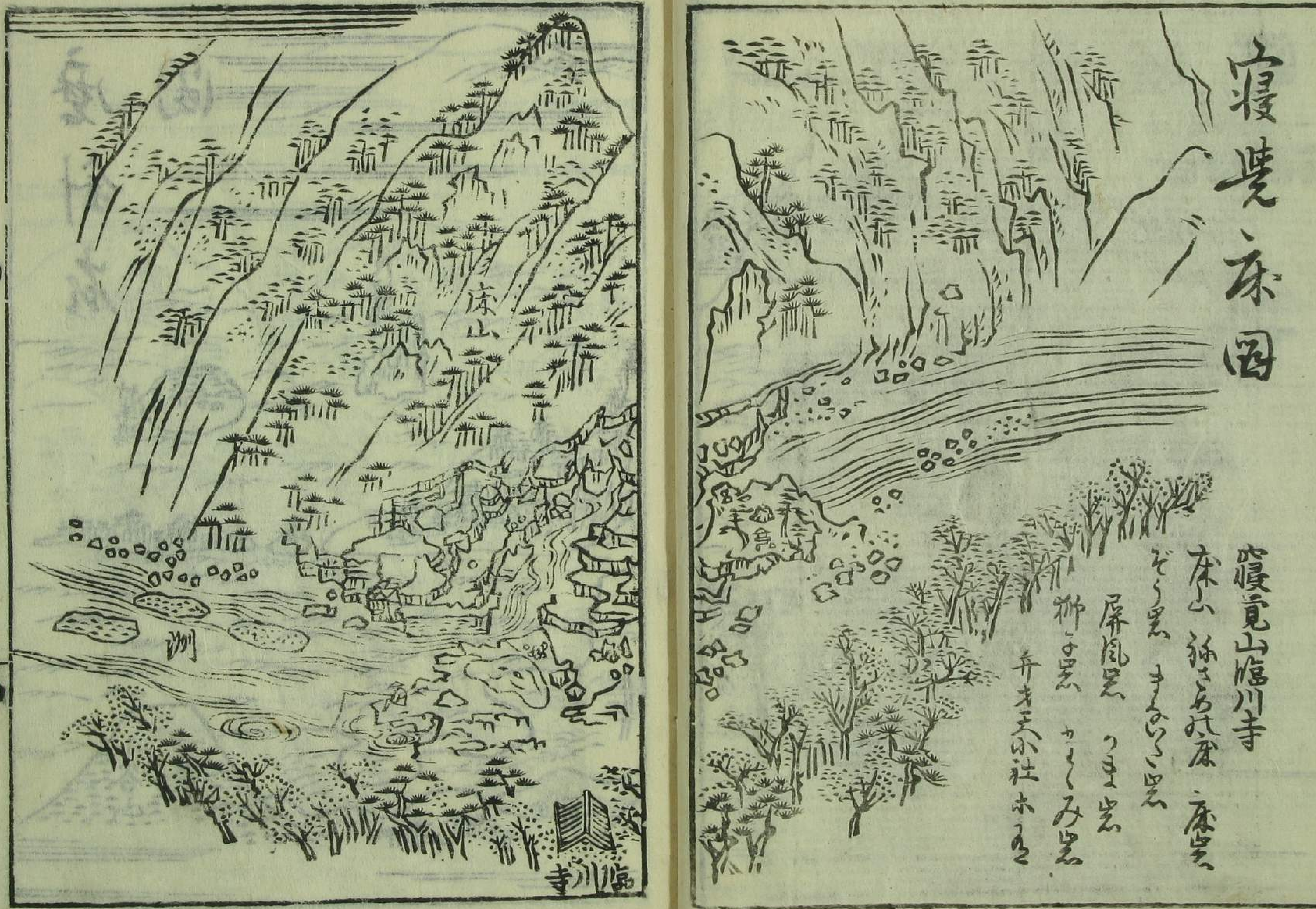
淺間山図
小松原

追分よりみたる
追分

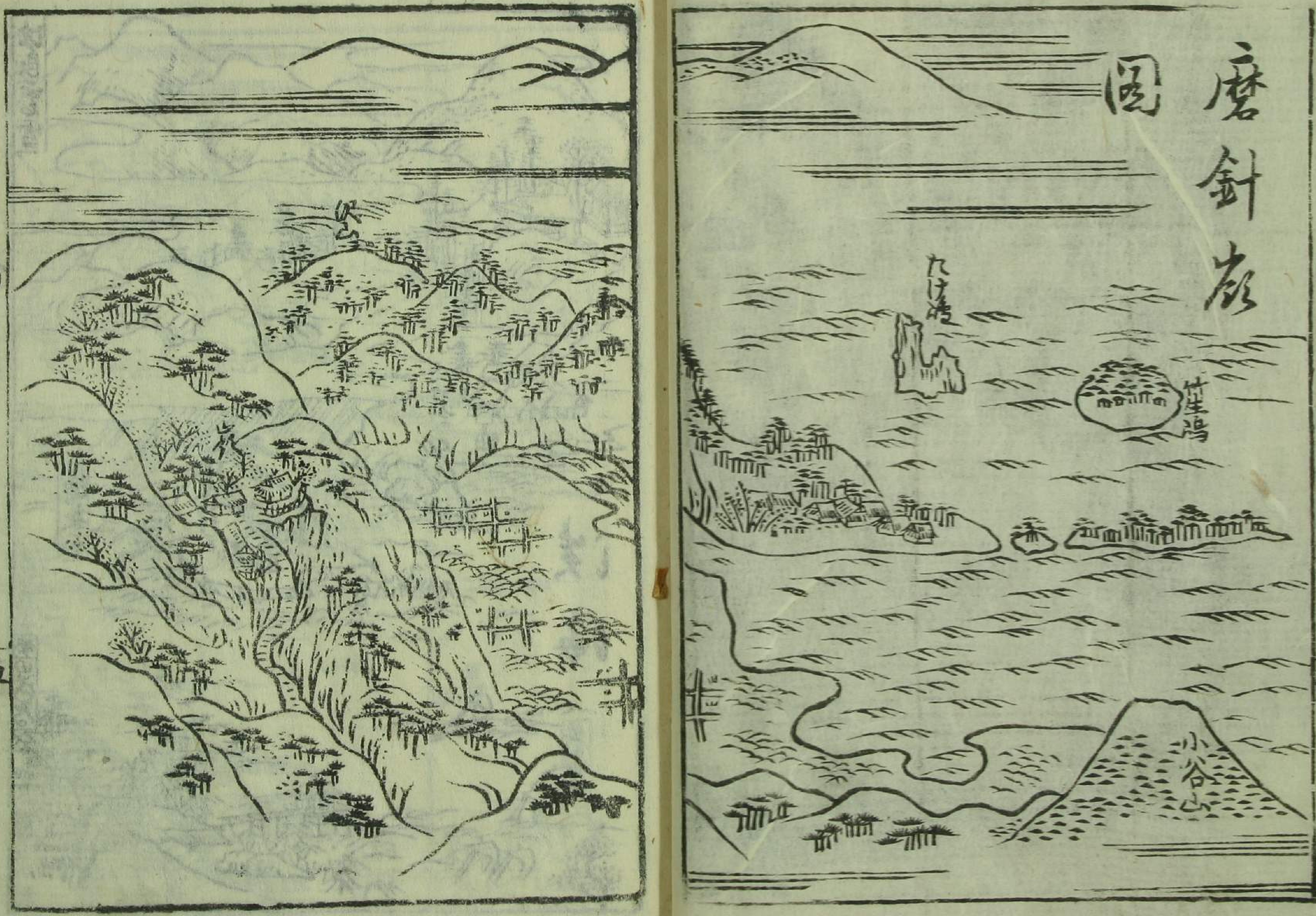
富士山


諏訪湖圖

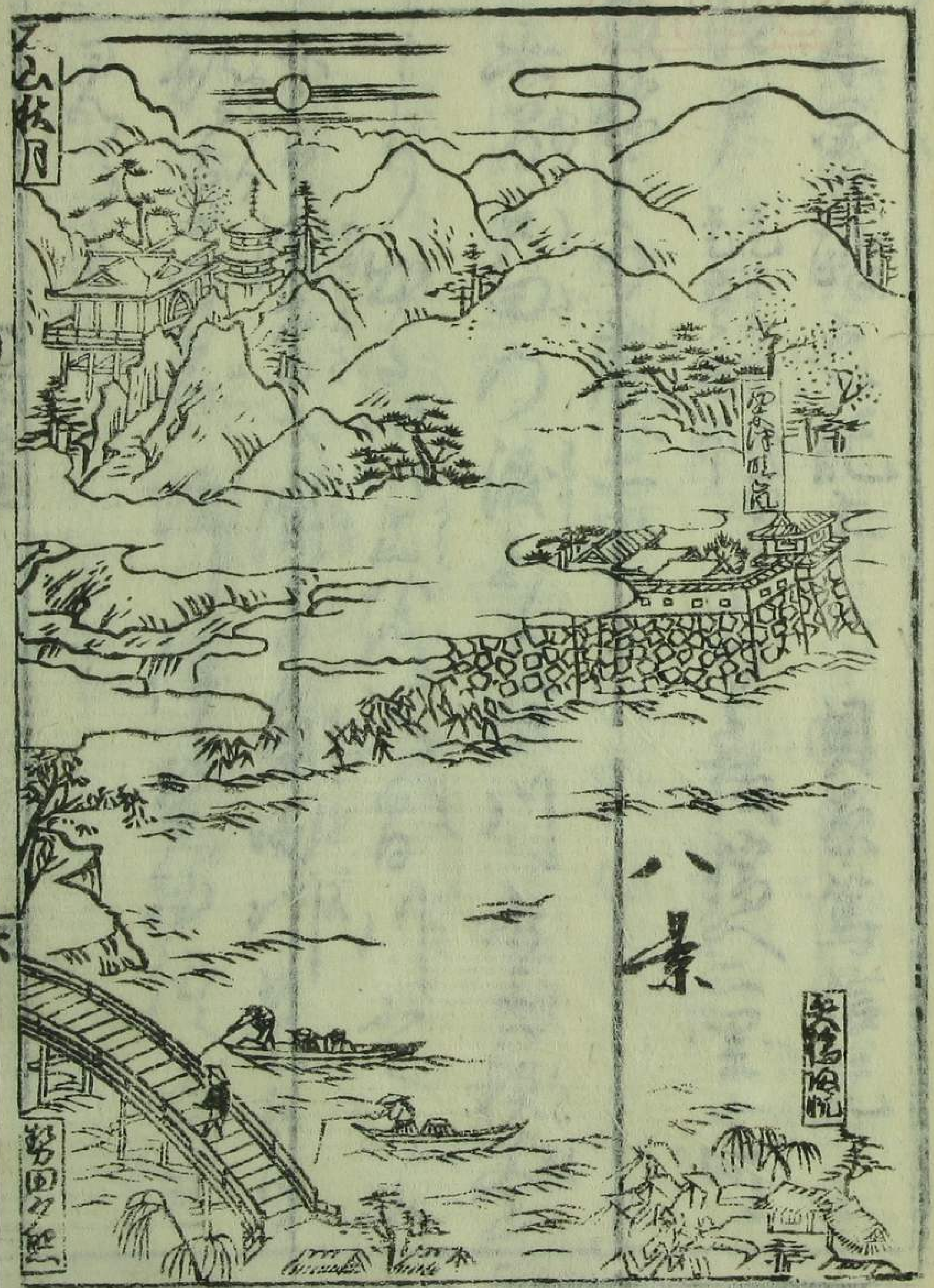
# 寝覚ノ床図


寝覚山臨川寺
床山　孫さわれ床　ゝ床岩
ぞう岩　まないた岩
屏風岩　つま岩
獅子岩　かくみ岩
弁才天小社ほこら
床山
洲
臨川寺

磨針嶺圖



比良暮雪
三井晩鐘
唐崎夜雨
堅田落雁
淡海


石山秋月
粟津晴嵐
八景
矢橋帰帆
勢田夕照

木曽路之記上　貝原篤信記

江戸（是より常武両國之境 是迄豊嶋郡）より板橋へ二里十町

板橋より蕨へ二里

此間戸田の渡あり此川水上ハ秩父より出る川上は入間川といふ下ハ浅草へ流る角田川是なり都鳥の名所也伊勢物語上ノを見えたり

蕨より浦和へ一里半
浦和より大宮へ一里十町
大宮より上尾へ二里
上尾より桶川へ一里ニ近し
桶川　足立郡より鴻巣へ一里廿町
桶川の町家数百軒許あり
鴻巣より熊谷へ三里半　但二里八町
鴻の巣民家百三十軒許町の出口に

右の方ハ日光へ行道なり。此道阿部の
豊後守殿領内。箕田村の中に八幡
あり。是渡辺綱が社也。綱ハ祖父よ
り箕田より来る故。箕田の源次と
号す○ま[illegible]村入口右の方に[illegible]
忍へ行道あり
熊谷より深谷へ二里廿町
熊谷の町家数百軒あり。熊谷次郎直実

縁せし所也。熊谷が寺に木像あり。其外
秩父へ三里半。秩父山は武蔵の甲と云
高山也。江戸の後ろに見ゆる。江
戸の坤の方に当る。秩父山の下畠山
といふ所に畠山重忠の館跡あり。城
のごとし。江戸より畠山へ十六里也。熊
谷より本庄へ二里半宿にあり。又水井
へ二里半ばかり。其実盛が領せし所



也。玉井村茶屋あり
深谷より本庄へ二里廿九丁
深谷宿数三百軒ばかり。此あたり岡部村
あり。岡部六弥太忠澄が古跡也。岡部
六弥太が旧宅なり。駿河に岡部
といふ六弥太宅有し。又は屋敷也（此所山小川より）
（こゝにハ本庄より岡部まで泥土多なり）
本庄より新町へ二里

本庄町家百むかし酒井采女家領分也
新町より倉賀野へ一里半
新町の民家二百許。町の出口に橋を
是ハ酒井雅楽頭殿領分之。岩鼻村ん
かん川。武蔵上野の境也。天正年中滝
川左近将監と。北条氏政と合戦し給所
之。かんな川の渡より。間部越前守殿領
分也

倉賀野より高崎へ一里半 是より以下上州也
倉賀野町民家二百五十軒。町中より東
向に浅間山みゆる。高崎へ行町はづれより
佐野へゆく道あり。高崎城主東西行り。道よ
里程よ佐野村あり。佐野の舟橋を渡せ
し川を。烏川之古哥多し。舟橋をつな
ぎし木なりとて。今ハ方々まで残りしと
云今ハなし。佐野源左衛門常世が庵宅も

佐野といふ。定家の森定家卿の旧跡也。
名所にハあらじ

高崎より板鼻へ一里三十町

高崎ハ町家多く繁昌なり。左の方関部
城下也侯城あり。高崎の辺より佐藩の
浅間の嶽よくみゆる。高崎ハ町にて高
き塔あり。是よりして高崎と号する
なりん。其塔の後に鍛と云村あり。綱筆を



寂く帰るがたちそこにとて富世の名
物也。高崎の辺にも絹多く織る

板鼻より安中へ三十町

板鼻の町家百余軒、城地ハ酒井雅楽
守殿御中宿より内後山城らしき分り
板鼻の南ふ紀の森一乃宮と云明
神あり。是より雅の貴家の神社あるべし

安中より松井田へ二里十六町

安中は家数五百軒。同所に御城あり。板倉
なり二万石余。碓日川に橋あり。これより
妙義山へ行道也。妙義山へハこれより
諸来一里の間也。およそ琵琶の首と
云所に坂あり。江戸へ登るまで、平坂の坂あり
松井田より坂本へ二里
松井田家数四百軒余。此所に松枝
云。此所に横川と云所に関所あり。築
根の岩のごとく。諸家のあやしき人をとむ
○妙義山ハ松井田の南のかたにそびえて山ま
松井田より坂本の西まで。凡五里ばかり
つゞきたる岩山也。高山にして草木なし
絶所にハなき紅楓のさし色薄の高さ
所に岩屋あり坂のうへに二町ほどの町あり
民家これ也。妙義山へ参詣とうちへの妹
息とる所也。寺もあり。町の東の家より東

けるとぞ。しかれバ上野國眼下に見えて
妙義山の町より石の階をおりゆけバ雲
上。妙義法師ぞ安置せし所なり。其験記
ありとて寛永元年人民ハ三尊散濁して
する人々の気ざしを聞こえて焼失ふ
次く堂の側に別当のあるぞ。雲穴あるに新
発意ある女巫堂に二十余人並居たる。
気儘の人女巫に逢て。御託をきかんと

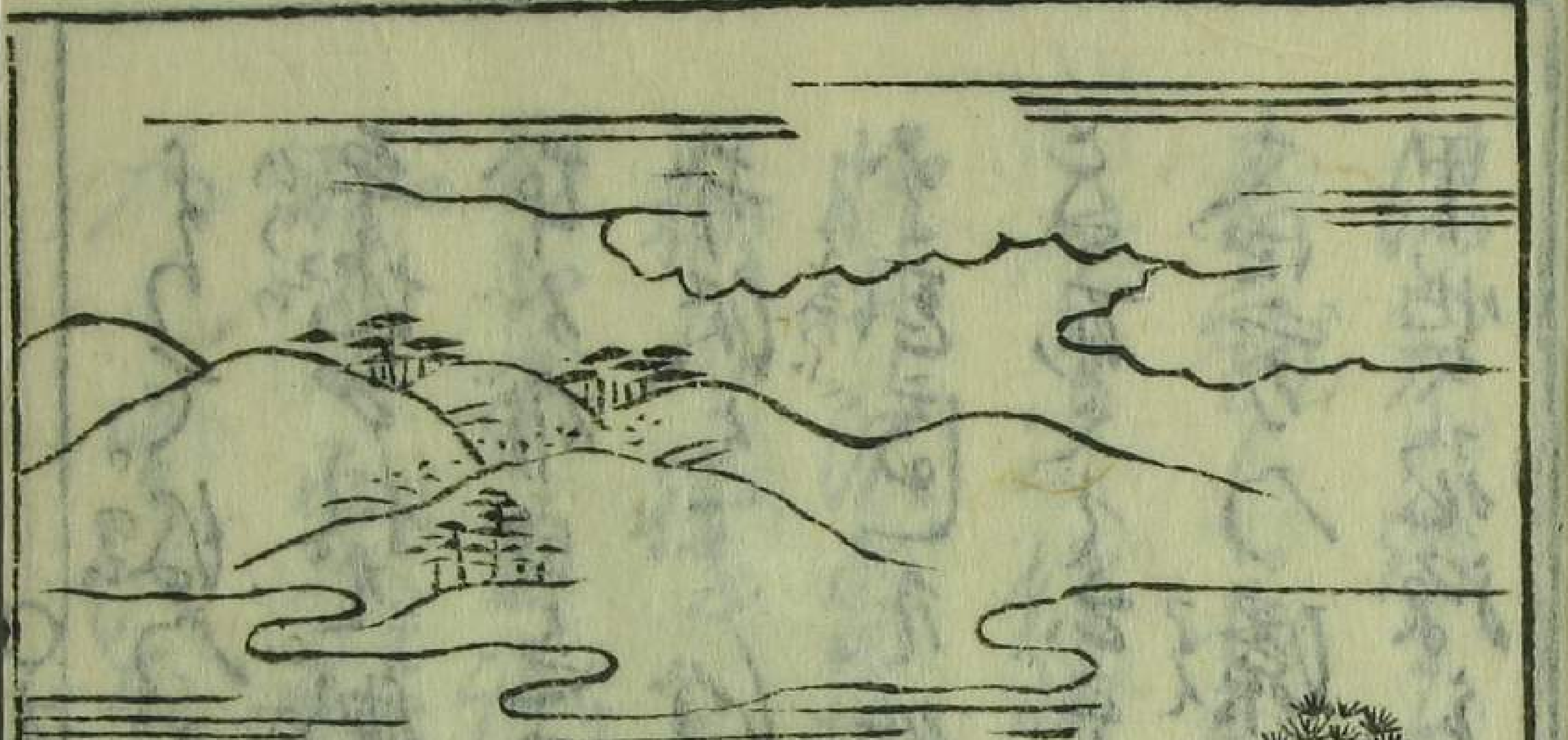
せんだ。託をのべて。咎をまぬがれしとの書面
を告ぐ。妙義法師は。法献山の法性坊
尊意といふ。延喜帝比叡山の人なり。此山
妙白雲山と号す。奥院へ麓より一里有。
中の嶽と云。又さがしとも云む其絶頂
と云ふ。此山世に類なき奇異の形状なれは
神異ある事いへなりがたく。御名ひとつハ必ず其
あり。故に行者ハ志ありてあり。○松井田と

坂本の宿に。世俗(せぞく)よいてんまちゆりわか大臣
の足(あし)あとし跡と云あり。凡(およそ)ゆりわか大臣と
云人。古書に見えざ世俗のいひ伝(つた)へなる事
信じがたし。但日本武尊(やまとたけるのみこと)をあやまりていふ
といひ伝(つた)へけるか。此辺(へん)ハ日本武尊ゆかりあるひ
しるし。又景行紀にも百合若大臣此古へ
紀る。強力武勇ありてつよき弓引し人
なりといひ伝ふ。日本武尊紀にも見え

ありしハ武勇すぐれてきこえけれバこそあれ
ハありし人にてやうやくいひ伝(つた)へたらんかし。然れ共
世に云伝ふるハ。嵯峨(さが)天皇の御宇に。四条
左大臣公光の子百合若(ゆりわか)大臣九州の惣
司としてあり豊後に住せられしとぞ。
日本武尊とハ時代ちがへり
坂本より軽井沢へ二里三十町
坂本此人家百二三十軒 許(ばかり) 是より坂を越(こえ)て

碓日嶺へ上る。左に入会の峠茶屋に
いたる。また此たうげは坂あり坂本に
入る境にあり。此山は東海道の足柄山箱根
山のごとし。されど足柄箱根のごとく険阻
にはあらず。坂なれど雉日嶺の下に。東
く行ばかりにて上坂石高くして嶮
石坂といふ。上坂は是よりて平なる所あり。
又雉日嶺に上る。是はさしづくし。碓日坂

山まで久しければ。武蔵下総上野
などの山。東の諸国を望み。筑波山などよく
みゆる。昔日本武尊東征し給ひ。碓日嶺
に登り給ひて辰巳の方を望みて弟橘姫を忍び給ひ三
度歎きて吾嬬者耶とのたまひしは此所
なるべし。是より山東の諸国を吾嬬といふと日
本紀の景行紀にみえたり。碓日嶺に茶
屋あり。町なり。冬は雪ふかし。右に熊野権現



現在す。此所上野信濃の境也。昔碓日坂にて。新田義貞の三男武蔵守義宗と。足利将軍尊氏と合戦ありし事。太平記に見えたり

軽井沢 佐久郡佐久郡 坂下佐久郡 沓掛へ一里五町

軽井沢家凡千軒碓日坂の下なれば宿里多く。ぐるりは浅間が嶽の麓也。浅間が嶽は小山をもて此所を今宮の里と云。佐野掛殿の面々

よりて。後(のち)の人名付たりし。凡江戸より坂本迄
平地(ひらち)なれば。漸々(やうやう)に登る故。坂本を山形(さんぎやう)と云。坂
本より碓日迄二里十町許(ばかり)よりて。碓日より軽
井沢迄峠の小半里ほど下りて。此地ハ諸国
より遠望(ゑんぼう)し。凡信濃ハ四方山囲(よう)まれ此地殊に高
き所と云。雲霧ハ海原(うなばら)のごとくして。山々を遠見(ゑんしや)する
又四方の瞭望(てんぼう)ハ信濃よりみれバ皆の下なり。
甲斐越後を地(ぢ)ろく陰気(いんき)なりしと見えたり。信



濃ハなべて寒き国なり。故に冬春ハ雪深く
寒気(かんき)厳し。此国ハ信濃の国の内にて殊に寒
き所なり。山へ信濃よりハ初て入と云。御嶽(みたけ)
軽井沢沓掛追分へ三宿を小浅間が
嶽の裾にまたがりて。其地高く。此三宿を
南北東西二三里程(ほど)ハいたつて広(ひろ)
野(の)にて寒(さむさ)き強くして五穀(ごこく)生(せう)せず。只稗蕎麦(ひえそば)
のミ生ぜし故。畠少(すくな)し。又菓(このミ)の樹(き)なし。民家(みんか)

ふる池なり。不老の池といひつべし。昔上総
憲政公。荒沼六郎を将として二万余人上
州白井の城へ発向せし。武田信玄より
板垣信形押よせて。碓井沢にて出合て戦
ふ。此時板垣勝利をとりしとなん

沓掛より追分へ一里三町

沓掛 家数六十四五軒許。町なかにより浅
間へ行道あり。離山迄一里半。離山より嶽
へ一里半ありと云。追分よりハ二里余
ありといふ。古戸関の跡一里半ありハ大井紙
家くらゐ。碓井沢より沓掛まで八幡平塚にて沓
掛と追分のあひだか前下也。西ありの代
の民家二ところあり。古宮ところやよの
宿なり

追分より小田井へ一里半

追分の町 家数八十許。芭木宿と小宮なり

北国と中まくら不る所。追分と云。宿の西
より北国へ行道あり。浅間が嶽の
西北方何処か。追分より善光寺へ十八
里余。越後境関川と云所まで追分よ
り二十四里半余。越後の高田へ追分
三十余里あり。越後より越中加賀越
前をへて京へのぼる道も北陸道也。能登ハ
海中へ出てある国なれバ北陸筋よりわかるゝ。追

分より小諸へ三里半めて。小諸と云宿也。
城あり。牧野周防守殿領分之。小諸田中と
云て上田へも。是も小諸より上田へ追分
八里余也。上田ハ千曲川のほとり之。今ハ
松平伊賀守殿居城之。越後より諸国往来
物産の所。此中にてハ自由之。奥地を名
しと云。真田と云所も上田のわきまで。天正
の頃より慶長まで。真田安房守居城

とぞ。是より上野の沼田をもうけ給ひし也
と云。沼田ハ上州廐橋のおくへ。是より八里
し。上田ハ松城石光寺などへ通り越路へ
行と云。川中嶋も道なり。姨捨山ハ上田
より又里先きぬまと云。更科郡之冠着山
ハ上田よりありと云。小県郡之伏屋ハ小諸山の
辺なり。松城ハ真田伊豆守居城之。是先
ハ丹波嶋と云宿あり。筑摩川をこえる。



落合川中嶋なり。筑摩川とさい川との
中より落合へ川中嶋と云。落合に横田川
あり。昔木曾義仲と。平家の方人(越
後城太郎と合戦まして取なり。永禄年
中武田信玄ハ甲州より出。長尾謙信ハ越
後より出合て。川中嶋にて合戦あり。善光寺
の先きに戸隠山あり。餘又は軍推議妖怪
ところ也取ろる山之山より戸隠明神の社在

より大社迄。追分より川中嶋迄十六里許ありと
云。善光寺の町小路九筋し。善光寺より越後
の高田へ十三里許ありと云○浅間が嶽ハさ
あて高しといへど。麓の比高紀左。高く
いはんどもど。山上に常に烟立事こてされい
このよろがごとく又雲を霧がごとし。此山津
ようよ草木生ぜに。一日の内ちぎし網
なる時もぞ。大風ける時ハ五里七里に及

夥しく鳴動して。皿茶碗の類をひびき
て破る事あり。焼石も飛と云。やけたるご
とく砂の降る事又多し。当所より
みるに。大焼ハまれ也。小焼ハ時々あり。江戸の
あたりへも。此山大焼の折節ハ時々灰を飛
來る事ありといふ。此山ハ江戸の方へ近く美
濃尾張の方へハ遠し。伊勢鵜殿より草華の
あたりの海牙。伊勢尾張の方よりわたる濃る

が嶽を見んて。奇絶いふべきやうなきに。偖
碓氷峠の方よりハ夜をこめて山路くだりて
見ぬれど。駒がたけハ結んで西なり。業平ハ浅間
上野の望ふて浅間が嶽をよめる奇絶。
伊勢物語をあやまる人あまりしれへしや。
追分より小田井へわかるゝハ。右の北がハへひとつて
西よある。凡軽井沢ゟ和田峠東までの
東の水ハながれハ皆ちくま川へ落合て越

後よながる。松城よ昔武田信玄の家臣
高坂弾正昌信在城す。其時ハ海津の城と
号す。○桐原と云名所も川中嶋よあり云

小田井より岩村田へ一里八町

小田井ハ家三十四五軒許あり。家あしくして
まづしき所也。小田井より南ハ高山あり。西の
端よ飯をもりたる如くなる山。飯盛が嶽
といふ。其東にあるを八がたけと云。岩峯八

ゆくなり。又八段(やまき)ともいふ。此はむかし古戦場なりと
三日月を雲多し
岩村田より塩名田へ一里八町（イ一八丁）
岩村田の町家八十許あり。町の入口より小諸
へ行道あり。二里あり。岩村田と。塩名田の
間に平塚村。猫塚村。下塚原村有り
塩名田より八幡へ二十七町
塩名田の町家七十許。町の出口に川を

千曲(ちくま)川と云。名高き大河なり。小橋をわた
り。此川ゆへなかれと田地遠り。川中嶋をめぐ
る。岩尾の城の下を流れ。越後高
田より出て海へ入と云
八幡より望月(もちづき)へ三十二町
八幡の町家百許。八幡の宮をいはふ。今山坂。
瓜生(うりふ)坂などゝ云坂あり
望月より芦田(あしだ)へ一里八町

望月乃町数百軒。町の北に古城の跡を
昔望月氏の代々居城なり。新羅の時。望
族望月相津。兄弟三人あり。其時より此土
なりといふ城山の西ハ大なる沼なり。望月の牧
ハ名所なり。望月の駒。望月の牧古跡
まよめりぐ延喜式に御牧七ケ所として其一を逸
皆御牧なりしといふ。今ハなし。望月の駒む
りし名物之。今もその性よし。望月の非の

姥乃出ずそ。望月并御牧七ケ所内牢を
のる絵をうしく。此所に鼻りてと一宿を中の
さず。望月より追分ハ七里。焼石山ハ
九里。若宮まへ十又里。鏡原高田わ
望月と芦田ある小川方。高山下に
西に難平ある。山下の原之望月村下三
里よあり。其余西に難村あり。是ハ初り
兄こしど。若武田信玄と。村上義清と。其

野平にて合戦あり。後に信玄と號
し。此所にて初度(しよど)の軍(いくさ)あり。又これより根
津村に移る。根津(ねづ)甚平が居る所也。此
は根津村の下にあり。又此辺に塩沢村あり。
本名に蔵(ぞう)しける也。塩沢と云士(さぶらい)を此所の人
まで此者よりかの方に上田に居る。西に出る
小笠原。芦田氏居る。石原坂と云坂あり。
又より望月嶽(たけ)を越と云

芦田より長久保へ一里廿八町
芦田は町家百許。此邑に芦田氏が居
城の跡(わだ)あり
長窪(ながくぼ) 小縣郡 より和田へ二里
長久保は家百餘。下和田村此窪の南に
大門村あり。此南に大門嶺(とうげ)あり。是より北は
谷々小高き也。此に武田信玄と信州の諸將(そさき)と
笠取(かさとり)との合戦あり。大門嶺合戦と云

和田より下の諏訪へ五里十六町

和田の町家百軒あり。此より和田嶺(たうげ)なり。
坂急し。上下ともに二里半許あり。東坂は
やさしき方なれ。西坂はけはしくそばだち険難(けんなん)
にはあらず。三月末(すゑ)までも雪あるべし。
路(みち)すがらとなりのこれり。嶺より東七八町よ。
からや村あり。嶺より西五六町よりちや屋あ
り。此あたり冬は雪ふかし

下諏訪より塩尻へ三里

下の諏訪ハ和田嶺の坂のふもと。家七百軒
ばかりあり。人すくなくわつかなり。坂のほとり
にも下の諏訪大明神あり。是を春宮といふ
また是町ほどの前にあり。是より五町(ちやう)ばかりに
を大明神の社あり。是を秋宮といふ。東の方
なるを大明神の祢宜正月朔日より春宮より
つし七月朔日より秋宮にうつし侍る。毎(まい)

殿秋輿にのせ奉る。元日には祭礼なし。
七月朔日又祭あり。春宮よりうつしまゐらす。
秋宮は下宮社なり。秋宮をみまゐらすしは春
宮は下宮社なり。上乃諏訪より下の諏訪へ
三里あり。上の諏訪の祭三月酉の日に
て。酉ある日三つあれば中を用二つあれば初を
用。鹿の頭を七十五。俎にのせ。神前に備ふ。
又別に鹿肉を料理し盛てそなふ。社

人とも鹿の肉を食とも。他人で社人ちゆ
るしをおせバ鹿の肉をくらふ。鹿ハむかしくの
猟師又ハ猟人なしとぞ。おわ来りて捧
ぐ。下の諏訪のまつりにハ鹿ハさらにへども下
の諏訪の社人も鹿食のゆるしをバおこと。
上の諏訪にハ年中七十五度の祭あり。
上の諏訪次度ハ度鹿之。社人ハ上下の社
ま各の人得。祝部も一人なり。上下の

社大祝禰宜各一人あり。又社僧ハ上下の
社ニ各宮坊有。社領ハ上ニ千石。下ニ五百
石附なり。上下ともに七年に一度寅申年御柱
とて大祭あり。其日四方より人多く集
る。其儀式おびたゞし。四月申寅の日をかぎて
あく周ゆ。下の諏訪より高島城へ一
里あり。諏訪安芸守居城なり。三万二
千石領なり。城ハ湖中にあつて。三方ハ湖也て。

陸の方一方より入口あり。是を前にかゝえて
六町許あり。左右ハ沼なり。深し。是へ橋
を掛。橋の下ハ川なり。船の出入自由之橋なり
志をぬけて紙。衣が崎と云名所之。此所よ
富士山の影うつると云。鳰の海の岸に縦流
なれバ衣が崎ニ来てこれぞ富士の上こぐ
あまのつり舟。夫木集に寄此海衣
がみそれかゞめ津。冬月くゞしよおりくるその

湖より上の諏訪社ある一里半余あり。湖
のめぐりを過て後田中を行。上の諏訪を
甲州の方なり。江戸ハ甲州を通り但し宮ニ出
来ル。又是より甲州を通るも下の諏
訪なる所に。諏訪の海 漢 浪 皆名所也。
古哥に○諏訪の湖ハ下諏訪の町の
南にあり。是より一里半あり。凡湖しき
二里程に見ゆる。湖まはりにて東西南北

周ひろさ凡七里ばかり。めぐり
に浦々ありて民家多し。四方にある
あり好景之漁人多して魚をとる。漁
舟并し漁舟の外舩にて家へ往来す。
け湖名高き氷ありてすき地も透る
なく。湖一面にふさがる。年ゝ寒温によ
る。霜月の初中旬或師走の初より
氷ありて渡人ハ其上を通ふ。春を迎よ

よりて正月の末二月の半迄ハ氷上を渡
る。二月半までとけれ共氷ハ二月末までわ
れず。寒ければおそく消る。氷のあつさ年
によりて八九寸。一尺二三寸あり。其上ハ何程の
大木大石を置ても更に障なし。幾万人
とほりてもあやうからず。氷の上とぶるゆへよ
くんずきさきて通る。其上に雪つもれバ幾千の
たれとも、くんずきそろそろず。よるんぢ草

履てとも。馬ハもとへ帰ゆへならバ。月
なか中に湖多しといへども。ぬくとく
氷たる所なし。信濃ハ国かみさく最北
高くして雲気寒ふかき国なる故也。
湖の上に冬ちかづきて氷たりて第三日
前氷落されど第四五日の法上に諏訪
より下の諏訪の方にまであらかじめ
大なる本石なども通りかく如く。氷の上に

わく付てみゆるが毎年のさかひとまる。奇
怪の事也。是を御渡と云。又神先とも云
御渡ありて後人通る。御渡なき内ハ
渡らず。これ怪うすき少々之年よりハ
渡の所かまりの諏訪よりハ事ハかく
見かし下の諏訪の方に此渡ある所ハあへ
あるべき所にあたる。年ハ豊年ならず候と云
此渡のもとり一文字につき。或ハゆがみ事

も。堀川院後百首神祇顕仲が哥に
すはの海氷の上の通路ハ神のわたりて
とくるなりとよめるハ此事なるべし○又諏訪
に温泉三処あり。上の諏訪に四ヶ所あり。此
所の人ハ朝夕にゆあみす。或ハ病ある患など
もろもろ皆温泉を用ゆ。往来の旅人
多く此湯に入るゆへ此所をすべて浴湯とよ
ぶなし。湖中にも温泉出る。冬ハ

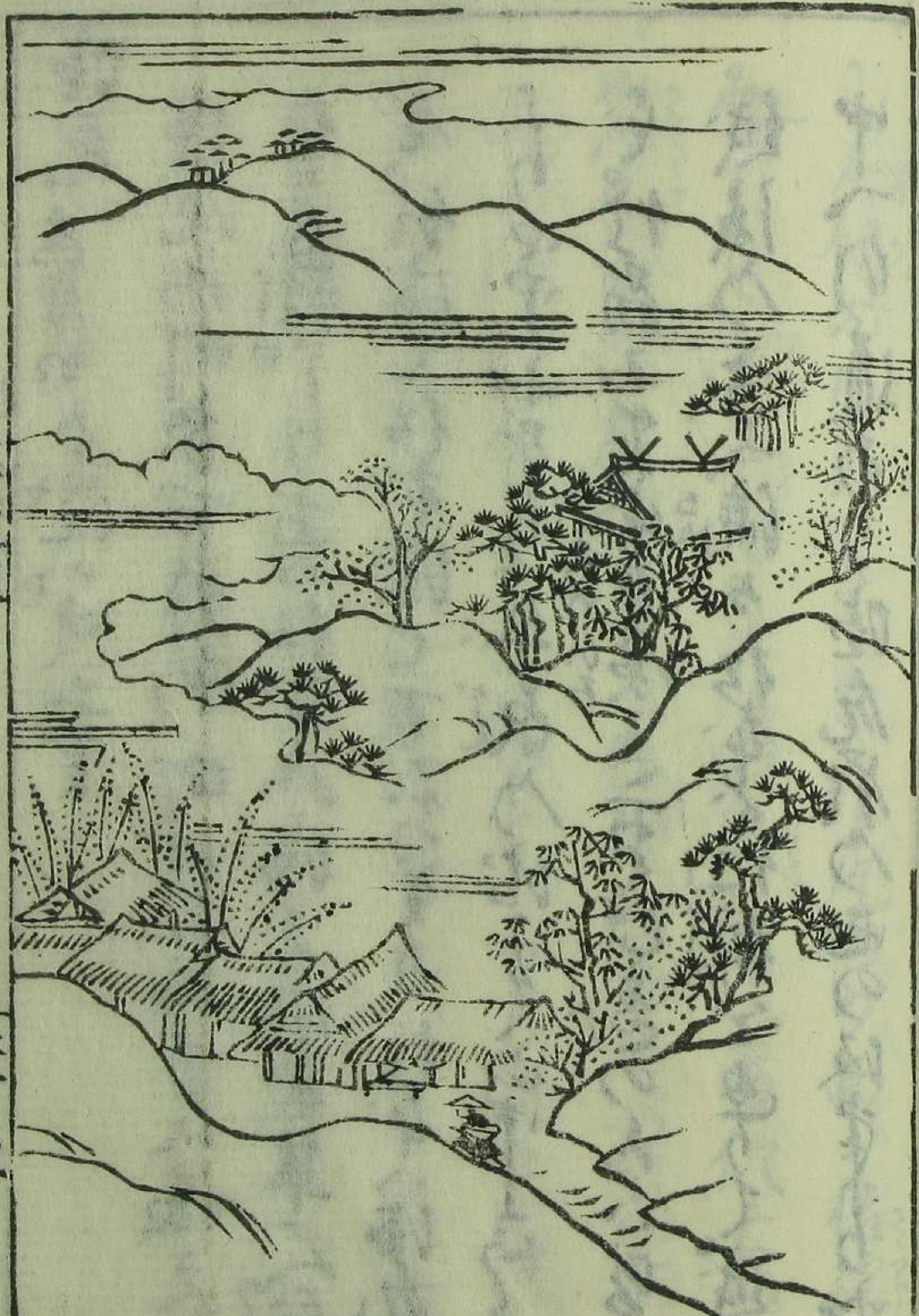
氷わるれどもせり。養生のために入る湯
と洗浴のために入る湯とハかはれり○此湖
氷をりて漁人氷の下にあみを引を氷
ひきと云。これ又奇異の事なり。氷を一尺ばか
りづゝうがちて其所にあみを入まきて
先網うがちの竿をおしてさきのうがち
より次のうがちたる所まであみを
通りやりて後所もろともにひきうがち

てあミをひろくかけて魚猟となす。昔ハう
くにの如くもろ〳〵をべをあつめて是をとる
漁人(ぎよじん)ともがらりわせんといへり○下諏訪は
より富士(ふじ)山まで廿五里ぞうりまぢあまよ
南(みなミ)の山なるこちら駿河(するが)にしてあちらが
ごしかもとなりぞ。但信濃ハ地たかきゆへ
富士山甚高くハ見えしたる。此湖水ハ西の
方よりながれ。南の伊奈郡をへて遠州へ

いで天竜川(てんりゆう)となる。是天竜川の源流(げんりう)なり
又天竜のみなかみまで四日路(ぢ)あり。上の
諏訪のうしろひれ山。鳳凰(ほうわう)がだけと云。是西
れ山にあり龍屋(りうや)がだけといふ。湖の艮(うしとら)の方の山
ば八がだけと云是小田井より見れば八岐(さき)乃
山なり。河(ぶ)も三ヶ所(かう)○湖のまはりなる小川
ようじひと云魚(いを)多(おほく)して是を活あよ
きくがひてのかぢを漁人ころ。ひろなる四河

どれよりお宮川どこよりのがれのがれて瀬の
らぶる。藁をたてゝわきまそころ。此池の人
色ハ赤魚といふ○伊奈郡のさかゐまで
下の諏訪より四里。伊奈郡ハ名所あり。伊奈
郡に城ハ二あり。高遠(たかとを)飯田(いひだ)なり。高遠の
城今ハ内藤駿河守殿居城三万三千石。飯
田の城ハ堀大和守殿居城二万石。近く。高遠
と飯田の間十里なり。下の諏訪より飯田

へ十八里。高遠へ八里あり○川中嶋へ下の
諏訪より十五里なり。越後の高田へ三
十里○諏訪のあふり夏数多し。しかれども
とへをとらへども是より所高浪りる事二
人あかすなり。此國より当湖(みさ)しとゆへだ。
宮ハ小出よりそげし○下のとやま枝(ひ)岩(がん)
桜京桜宮し。宮ハ山ゆへま載ひらく幸作(さ)
生より至(いた)し○下の諏訪と塩尻の間より



塩尻嶺ハ坂ハ坂本より社あれバ東居
あり。此所も東條ハ木曽河り。若武田
信玄下の諏訪の方より出。松本の城主小
笠原氏と木曽義昌ハ桔梗原より出て。
塩尻嶺まで甲州勢と信濃衆と合戦す
しかり。塩尻嶺より西筑摩の郡かり。此
坂より富士山ミゆる。又上の諏訪。高遠城
ミゆる

塩尻 筑摩郡 より洗馬(せば)へ二里

塩尻は町家百餘軒。町口右の方八幡宮
あり。嶺(たうげ)より西は松本より塩を取牛馬会
度給して松本藩七万石のまゝり松本は塩尻
より四里なり。平原(にごん)の北にして山中より行
ど。信濃にて山家(やまが)広(ひろ)き下くは高邑の名は諸
越後の方へ流る。松本は仁科(にしな)を通りて越
中へ行道あり。塩尻嶺の西の坂まで松

よ大網(おほあみ)の白糸(しろ)を左 塩尻のお西に桔梗(ききやう)
原とて広(ひろ)き地あり。田畠なし。昔信玄の
先手(さきて)某村上の家つ松本の諸士小笠原
氏と。桔梗原にて合戦ありし軍信
玄家臣(から)の桔梗○塩尻嶺の西より高井嶺の
東までの名は諸州へながれて筑摩(ちくま)川へは
入て越後へくだる

洗馬(せば)より本山へ三十町

洗馬(せば)の町家八十軒ばかり也。町の東入口
に。太田野筆入茶屋あり。西の出口に小
沢川と云小二里に今井と云所あり為
平が住し所也と云。又塞説あり。木曽に
も今井と云所を為平住せしと云。洗馬の
町に昔太田の清水として旧跡あり。木曽義仲
の馬をあらひし所也。洗馬と名付と云
○洗馬より松本へ四里。善光寺へ十九里。越後



高田へ出一里。川中嶋の内稲荷山の町と
十一里。松代へ稲荷山より五里
善光寺より飯山へ二里
本山の町家八十軒程也。町の西の出口に小
橋あり。右に川ながるる。是より木曽山なれば町
木曽路者右よりはじまる。ここ先(さき)に桜沢と
云所に橋あり。木曽流るる。木曽は尾張の
此所之境也。東は松本領也。西は木曽領也

猶ぎ八丁坂あり。それより川花より参る事なし光
まし云川あり川の流にそひて尾州君の関所あり
贄川より奈良井へ一里半
贄川の町家六七十軒あり町の東に入口
左の方に番所あり。わしこみ村あり坂あり上り口
平橋あり坂川をこえる事あり。平沢村より二町程
行奈良井橋といふ橋あり奈良井川を左にして入る所
奈良井より薮原へ一里半

奈良井の町民家百ばかりあり。此町より又たか
しきまげ物家々にありて多くうり。小
峠が先より小さくけはしくて二里あり。峠よりも木曽
御嶽の合戦場あり鳥居嶺合戦場とは
昔天正十年武田勝頼の今福筑前をして大
将として人数八千餘此所へ押よせ木曽を責る
時義昌ハ信長方として七千餘人にて
鳥居嶺へ押向戦けるが。木曽勝利をえて

甲州勢おほく討とる。鳥居峠ハ是より十町
程此所にあり。木曽義仲硯水と云あり。鳥井峠
ハ碓氷峠より坂多し。鳥居のかゝりはきやうき
所なり。昔木曽の御嶽の鳥居有に依て
名付と云。今ハ鳥居なし。坂路殊に多く口藪原
の入口なかおよそ荒涼たる山へのぼりて高山ハ
昔ハ今遠度居跡也。是より十九里あり。荒涼
より江戸へ行よハ此所をもつて是より荒涼へ行所

ハ甚難所にて馬にて越へし。牛馬のりて坂
を上下すると云ふ

## 藪原より宮の越へ二里

藪原町数八十軒ばかり有。此所本宮の社あり。上よ
り入てす也。是より下る所ハ本当の旨也。
名十七里也。将軍ハ源氏嫡流也。続日本紀文
武天皇大宝二年十二月に始て美濃国
岐蘇山路を開くよし記せり。昔ハ美濃よ

廢せしむべし。當信濃美濃二國の界險阻
にして通路かたし。此時始てうけ
て通路となす事。又續日本紀元明天皇紀
よと見えたり。町の南に本宮川ありよみゆか。薮
原ケ川よより荻村と云村あり。是より材木多くある
と云。川よより荻村より西にくれハ村都て。是本宮川
の水上也。凡本宮川若いふゝ見へひろく。吉田村
今二三町か。本宮川に橋あり。是より川をわたりみな。



是の越乃おち。徳惠志村れ川ひろく尤よハ波
の事なり。是高賀宮義仲社と云。千年之乃ぶ
猶又此尾をと云もじよ。あ平かり取にあふ塚のご
とくえ。おたへありしこと云。社の下に木曽義
仲乃墨我の跡あり。平沢より横二町ばかり
つまり兵六町過ぎに川ひろく左に徳惠宮
是。巴が墓所の跡と宮小あり。山吹が平を
志よある。徳惠宮村の下れ大橋あり。本宮川

の橋くい此橋をこそいへれど本名ハ河志といふ
又の勝ハ福島へ一里半
宮の越駅の家数五十軒ばかりなり。又此駅よ
り三町ほどの道より左ハ樋口次郎が
館跡の碑あり乎地へ樋口が谷といふ。又此駅
に一里下に上田と云所あり。兼平が父本名
の仲三兼遠が館跡の碑あり。本名義仲
の父帯刀先生義賢ハ悪源太義平によ

て殺されし時。義仲二歳なりしを母抱て
信濃へ逃げ下り本名は仲三兼遠を頼みし处。
兼遠是を養育してひそかに木曾にて
育乳母夫仲三権守兼遠とあり○宮の
越の里一里下に原野と云町より左の上
に徳音寺といふ寺ありて材木多し。原野の
町ゟ左へひろき所あり。こゝより駒が嶽を
見る。駒が嶽ハ此の駅より一里下にあり。こゝは

駒に似たる大石を在名付。下より見ゆ
る山を草平三ツ。駒石なりとよく見ゆる也を大
嶽といふ。絶て大かたる山なく。麓より遠望分
しくる也。是も木曽山なく。白雪の雪。六月末ぐ
間おゐて消えぬ。八月より又つもる。駒ヶ嶽の
麓大原とて宮の越より入。かゞる。駒ヶ嶽よ
のぼる所なり。此所東八幡宮頭なり
福島より上松へ二里半



福島の町家数百二三十軒ばかり。木曽の中
ようの駅なり。町は清らにしてむかしより町の繁
賣物かずしるし。町の入口左の方よ云福
より関番所。此所こそ出入の荷物改
物と女とはいまはそのむかしより。番所
江のごとし。山村甚兵衛といふ人。尾州公の
与力なるが。此所に在住せり。知行七千石
祖は木曽義政の家人なり。町のひがし

棧道るとて棧るあり。板敷なり。是よ
り七八町ありて木曽のかけはし也。木曽川
にかけたる橋にはあらず。此のそはの絶たる
所よりかけたる橋也。石の方は木曽川に出
たり。横二間長十間ある板橋也。欄干あり。
敖房八石垣つきたり。ひとしハおやうにて西
くだし。今ハ尾州より此橋を雲國より
け給て。御いそうありてうけたまはり。川ハ西

の方にあるさしたる。川の川ハ大きなるふりて瀬たり。
立て通川だらに大なる岩多し。好景ゑハ橋
橋の下ふ見の方より。別に大きなる川みなれ
おちたり。荻原の宿よりながれて木曽の
平岩よりハ水ほそし。おんたけ川と云。
おんたけとは木曽の御嶽なり。王岩に
奥にも材木おびたゞし。福島より王岩の
川上ハ十里ばかりなり。此川より材木多くお

云。教里嶺上の方に。木曽の御たけとて。
駒がたけより大にして高き山あり。小より
ある人なりとも。常は雪むもきらぬ山なり。富士浅
間にも劣らぬ霊の山と。所の人はおんたけと
云。御嶽なり。川の東北の麓に御たけ大島と
井る。其地を合流と云。御たけ川と。木曽谷
の川ともに合ふれは合流と名付く。此
地は御たけ。凡木曽山中に樹木多




き事いふ可及じ。檜さはら松まき木など
記すに。杉樅。多やさはなりくして多くは
うらず。故に土人がこと生業ぬぐて植けは
よ木曽材にて有し。山中の諸処の松とりに
色ら乃木多し。大木を。系ハをり杉木に
似たり。枝は右ぐくにしてもひごれなど実は
あり。株子なくし。土民とりて粉にし
餅として飯にまて食ふ。也飢饉をた

とく。言木横紋ありて器に作るべしと
いへども尾州より禁制ありてきらず。実に
珍なる名木なれども少へし。材木なる杣人
は尾州より和泉紀伊並近江の杣人を
備て遣はる。毎年春の雪消。二三月
ころより入て十月にかへる。およそ幾千百人と
いふ事をしらず。其外はあらはに杣人さき
ありて作りて毎日引をさるずとも方々

本当へ通る。此杣人は山中に家をなして居
住し。本材をすり材木に割或は割にしてより
て。長さ四尺計なる。小さき本は川へ流せば
六ケ敷く所は流して小しは川中の石に
かかりて流ありたるは筏に繋へうる来り
てかかりすといふ。毎にりしとりやくて石
あるをしば通りてば此かり本ども本ある
をもて。其流の内を田に四里川上とす。

郷織と云所にいたる。此所につきていへば
むかしわてひとつ河をもへだてゝ左は
とくし。家まて伊奈に入り。東名蝦田
へだて。蝦田の西の方に。白馬と
いふ所あり。流るゝ所にいへども。是北にて高
人賀より流るへうつりても。東竹二
人つ孫に郷織に居て。此事をきゝ
とる。郷織に八町あし。本覚はすてにかれ



本郷といふ事にかなへる制札あり。故
に一本をもわけとよくとゝまるべし

木曽路記上終

# 木曾路記巻下　貝原篤信記

上松より須原へ三里九町
上松の民家八十ばかり。是迄ハ京へつゞく
小もどれさり。町よりお行く諏訪大
明神の鳥居あり。それよりさかり
寝覚のちや屋あり。上松の町より
はちや屋まで十四町あり。此里に
ハ遊し茶屋よりまた二町程前へ行

て臨川寺といふ禅寺あり。寺のうしろよ
浦島が住りし寝覚の床あり。寺
よりゆく岩間つたひて寝ざめ乃
床へくだる道あり。道よりおるれバさかし。
寝ざめの床ハ木曽川のきはにあり。大
なる岩あまり。岩のよこ十間。長さ四十間
ばかりあり。其岩の上に弁才天のち
いさき社あり。是一眼ひさく石の上平



なり。所がらにて寝ざめの床と云。是大
岩の畳かさなりたるの奇特といふ
をなして上平なり。東の方ハ河原の
ごとく大石ありかさなりあし。西ハ木曽
川なかる。寝ざめの床乃大岩ハ西の方
木曽川よりのぞみてみれバ屏風を
立たるがごとし。むかひにも大岩あり。岸
根のまゝ二尺或ハ三間瀬ありて激

のごとくなるがごとくながる。大河かくのごと
くせばくながれてゆくふりたるすがたなりか
ら。平安岩のせばき所、長さ十間ばかり
なり。上の方に落口の岩は上臈岩
といふ。河中にまた板石とて一つの石、河
を川ひろひの大岩のもとに三つ穴あり。
一の大なるは大釜といふ。二の小さきを小
釜といふ。皆それぞれにしたがひてひよこ屏



風岩とて屏風を立てたるごとくなる岩
あり。向の大岩は下のかたにまくみ岩
とて其のごとくなる岩あり。又思ひ
岩とて思ばしに似たる岩あり。ここもとに
川のこなたに平岩あり。平岩は不
黒岩あり。黒岩と象岩といふ川
ぞへに岩山あり。これに桧林栂松
などしげりて面白し。抑これ此辺は

絶而のすぐれたる風景にもこえて。奇
妙なる風景なり。いと珍しく懸るべし
にあるしがたくてはよものくがてし。酒
將が事。日本紀雄略帝紀并に扶
桑略記よ見えてくらば此地よりいでしる
いふしど。又むかし本名の禅ざめ乃
床よ三峰の氣といふりのありく。去
生の業と人よあらしらすと三峰と



よる世俗の寓よ作りり。又飛雲と
いふ寓よ。本名山中にて三熊野の
山ぶし。おもしきりのよあひそりし
ても此作まり。性なる書よ見えざれ
ば二つあらし信しがてし ◯ 禅ざめの寐
屋とるくおゆけば。おか川の橋とて
大なる橋あり。あまに小野の滝あるも。
見るすなる滝なり。細川玄旨乃説

乃本著鐵(ずく)といふ紀州よ。本著源出所
の瀧といふハ布引箕面(みのお)たぐひかも。おさ
くおとりやはとる。是程の瀧乃此邊の
三瀧(うこまらく)よいふかもしらるやとりまう
浪原より野尻へ壱里拾町
此所え稲のとしめ大きまて今井出
過ぐるづまて道かゝる。浪原の町家数
八十ばかり。大きなるて長き橋あり。大鳩

村より五六町行て関山の橋坂の上よ
ありかけしたらぱし此所よ関あり
故よ関山といふ○此間今井と云所を
今井の四郎兼平館(らう)をしる所也といふ
野尻より三箇野(ごとの)へ二里半
野尻家数五十許兵田村より十町程
行ぱていい坂ありぱそれよ橋二あり。一を
探干(らんかん)ありぱあてんのはしといふ。九経流

路ハ皆山中なり。熊野本宮より山中
は深山幽谷にてそびへし山のそばをつたひ
行けば路せばし。谷窓野尻といふ所との
間なるあやうき路なりけるが、山道
ともいふのかよひぢなりたる石ばかり
きりたる行たる石ハ数十間ある所にかけて
屏風をたてたるやうなる所もあまたあり
下ハ本宮川の流きよくしてかけし

多し。中にもある名代ゑし本當乃
かけしよりあやしい。つまり川の上
まうきたる橋はわかれそいふのうえ
ふる所ふうけふる橋ありうなうれうき
はし廣瀬などに多し。絶望にいうや
うのかけしまれたり。山の尾濤とい
くるも渡りて。岩白へ入て、尤の山は尾
をまいる所多し。おゆうれるすくなし




じきふ中橋といふ所ありて、是むかしは
堀反とぞ云所にて、ぶんか若川あらずましき
ひろひしこれをしも、岸ふ大岩あって
とれ好景なり。又、下の方で横
河戸と云所は若川とくより流れ橋あり。
横河戸のそうしこといふ。又うけてしる。曲
尺のごとく渡りてうきたる橋也。若川
乃奥よ横川といふ村あり。それより山中の

橋かけしと。尾列君よりうきたまへり
千流いふ悪事多しといふ
三留野より妻籠へ壱里半
三留野は民家六十軒程あり
妻籠より馬籠へ二里
妻籠の西乃出口の橋より前は紀
乃あり。清内路越と云。これより清内路まで
と云下より六里あり。清内路より伊奈へ



行は悪路険難なり。伊奈より米を負
濃尾張へ出すと也。又是より伊奈へ
も大平嶺と通り。飯塵山の下とをるぞ
濃田へ出る○妻籠より木曽川西の
方に[illegible]く流るゝハ東南より行て妻籠
峠をこゆるゆへ木曽川と右に見く
見る。是よりはしめて木曽川左に見るか
に。妻籠峠とこえる籠まくるれバ本

曽の山中を出るところの坂。木曽の渉
坂なり。俗にいふる寝覚と云。又風越乃
峯もあるゝとぞ。東なる閻王にいはれ
づまもあるぞ。木曽路も木曽なれば
としる木曽路も皆名所なり。川は流
ませも古多多しく。凡木曽の山中。桟川
よりてある多くして廿一里。是木曽乃谷は
是の東はるれ大河にして石大なり

嶮し故に船かよはし。谷中せ
ばき故に田畠まれにして村里まばら
し。米大豆は松本より運送す。山中に
茅屋なくして皆板葺也。家さかげ
土壁なし。ところ板塀なり。凡
往還に行し家の床まれ也。家毎に喜さ
少く稼業め多く、作と用ゆる
檜木を用て細工桶の細工あり

檜木と申菓ハ他国より賞翫するなり ○
野尻より下にハ竹と茶の木おほくえん
より野尻より東雁田嶽までの間を
八里ばかり。野尻ハ塩潮ひさくして其流
ゐ近く川上より温かなる故也。又伊
流に寒橋 梅ヶ枝 本流本流しか
しば笠を宿かかへけり。桜ハ六
月に熟す。とも山中桜も多し。ここに桃

紅梅ハ三月の末比まで一際よし。
又当国ニハ松とて冬ハ葉のごとく
くくく枝の表葉の松あり枝を松と云
ゐ。是より其流園枝合へ十七里
ゐ。村の民家廿七八軒許ありけるに
中さき町より枝合の東乃入口。倉ヶ橋
といふ。又伊流乃安曇郡く其流の
ほとり也。又より東ハ本宮也。本名も安

恵那なり。凡信濃は東は上野。南は
甲斐遠江三河。北は越後越中飛騨。
西は美濃なり。凡八ヶ国に隣る。四
のおもてさびしく嶺より美濃境まで。
東西四十七里余あり

落合　美濃国恵那郡　是より以下美濃　より中津川へ一里

落合の民家九十軒許これより西あり
松坂下りにあれども流沢山の中なれば



て。険難なくしてかやすくなる。木曽路
をあかく家に出れば先我家に帰りて見
へうる心地ぞする。唐の詩人雍陶が為陽
出斜谷詩に。行過険桟出褒斜。出山
尽平川似到家。無限客愁今日散。馬
頭初見米嚢花。と誦けしかかりし。落
合の南なる大山を横長嶺といふなげ
山也。苗木の城がよこゆる。小たかき山

のよふあり。本宮川城南紙なかれ。飛澤
川ハよむかろ。今ハ是を云和泉ある庵呂鏡
なり。舩税一万五千石。瀬落合と中津
川の道よりハよ。孫さめ廿里あり名
所也一説ハ杭瀬川の上。中森といふか
とのよしいへり

中津川より大井へ二里半六町

中津川の町民家二百餘あり。根津乃

甚平か石塔あり

大井より大久手へ三里半

大井ハ民家百廿軒程あり。中野村よ
り東へ尾州名護屋へ行道あり。岩村
及ひ又、竜へ通りゆく。大久手へハ左へ行
小の方へ行。此辺ハ西行坂とて坂あり。
西行が墓あり

大久手より細久手へ壱里半

大久保の家三十四五軒大久保細
久保いづれもいやしくわざ小なる町
なり此所に琵琶坂とてあり此坂乃上
より艮の方に木曽の見へてけしきよきに
丹加賀の国白山しらくみゆる白山は越よ
家の麓まで二里あり。毛田幸三番乃
越前へかゝり越後の山あひよりこゆるぞ又
此地より西は伊吹山こゆる

細久保より御嶽へ三里
細久保の家五十許あり
御嶽 可見那より続見へ壱里
御嶽の民家百三十軒あり町のごと
これ方乃小山に蔵王権現の社あり。
吉野の蔵王を勧請しけるにや。吉
野山を御嶽といへば此宮をもて
と名付くるなるべし。此嶽の町の東乃

ちづまより西の方みなみらに袖そ岳
木の松なぞ東海道乃如し其より東
ははなみらに並木の松なし此嶺
より西ハ平地なり其より東ハすべて
山里なり町の西ちづまの方に下見
れ大なるとて大なる薬師堂あり
下見郡なれどもかくれなきしけ内
さりにうゆうれ大ちるいめづらし船百

石　公儀より附

伏見より大田へ二里

伏見の町民屋甲許也町より左よ
名古屋へ行なるまで大田の宿まで東のさ
にに大田川あり其上本宮川乃
おもむくほうくまいる大河なりのまた道
まさ瀬多し大田より一里川上河合
と云所まで木曽川飛騨川ひとつり

落合なり。豊川も大河なれども本
菅川よりおそし。吉田川の下　尾越川
なり。吉田川より東の方可児郡也。伊勢への
権現金山の城あり。信長公の臣森
三左衛門武蔵守居城なり
吉田より鵜沼へ二里
吉田の宿。今渡二百五十軒程あり吉田
此宿乃上まて船着なく。木曽川よりある

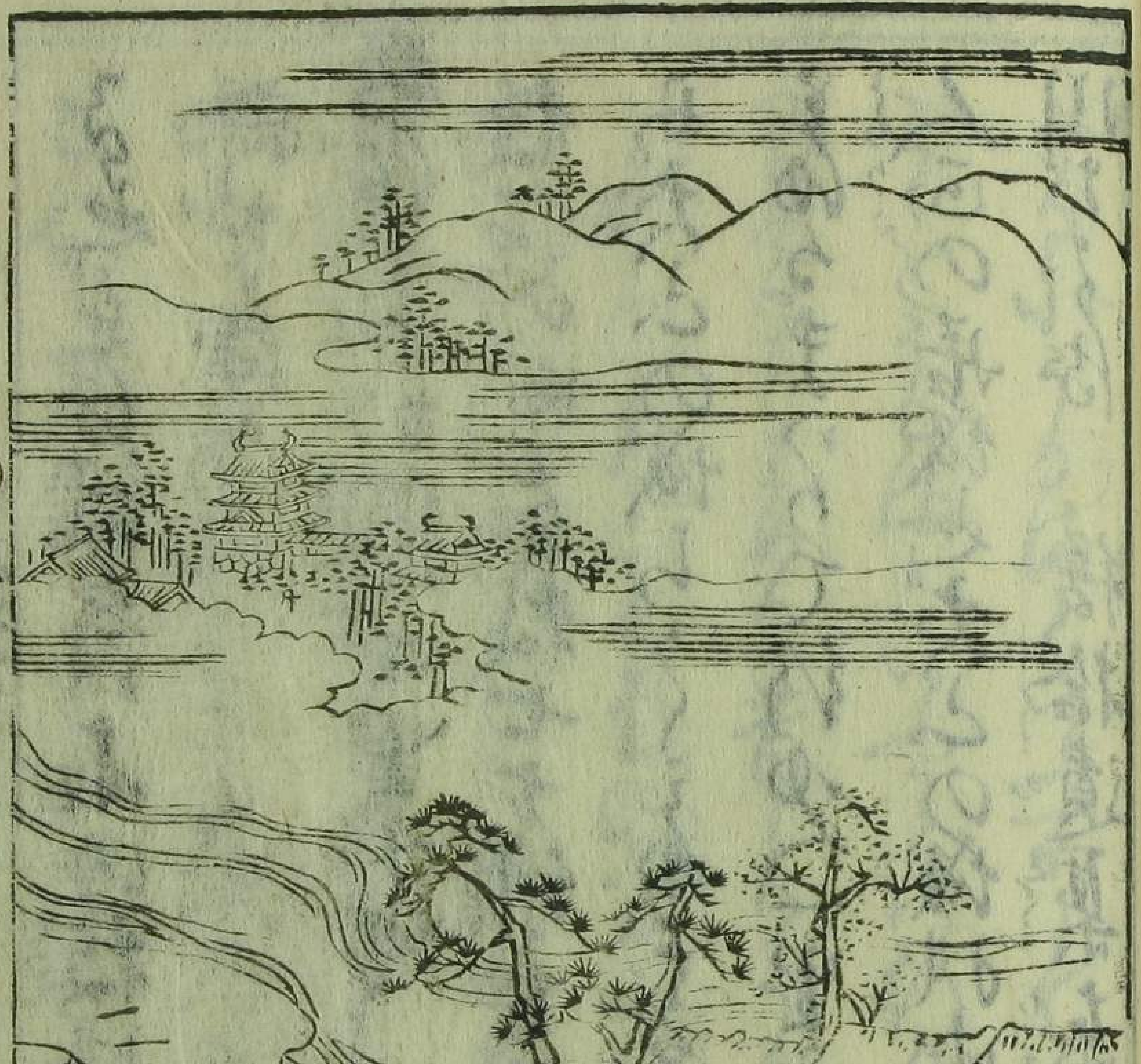


薪たばね紙にそくし。吉田よりつき
の方に土岐まで高須を通し美
濃乃土岐氏領分也。吉田より名古屋へ
九里あり○吉田より一里ほど蜂屋と
いふ所あり。此の村より柿を出してそ
ちや。出る紙げゞつりては柿を柿と了す。美
濃の柿より此辺より出る蜂屋柿
と云。蜂屋よ断なし○美濃紙ハ吉田

の北乾にある武儀郡より多く出る。武
儀郡の内いぐらの谷とてひろき谷なり。
此ところより紙よく多く出る尾州君の御領
内なり○関ハ太田の北二里半にあり。
ひろき所也。岐阜につゞく。商人多し。山
中諸方より荷物に出る所也。むかしより
鍛冶多し。小刀鍛冶も数おほし。今十四
五人位ある。郡上ハ五万石也。郡上の内八幡と



いふ所よ。青山信濃守殿居城あり。関と通
ふ所也。太田より八幡へ十一里あり。郡上ハ
山中なる三万石餘あり○太田の坤
に向ひて山をこゆれば下ございを本
巣川などいふ。取組といふ村なら又本巣川
に添ふて根尾筋までも先のあひよある山を
おもいしと云。又うん坂ともいふ。山のそばはれが
けにそひる。かけはし二所也。危し。左の



下は本宮川ながれ川辺の景色よく清ら
かにて見る事也好景也されば河瀬よりあがり
薪をたてたる舟わたくくだるは急なる所
故舟はくだるゝ飛がごとし是又よき
見物也さてそれより坂長坂しもの坂と云
坂ありそれより島乃ふもと即稲沼也本宮
より奥田辺の間乃農人をやとひ一ッを奥
人まそれぞれ田をとろすぐ絶ずして見ざる

る也。ところの名ハ本の枝れごしと号鞨
耕作あり
鵜沼より加納へ四里十町
鵜沼の町家数七十軒あり。鵜沼の南の方
に。犬山の城ちかくみゆる。これより十町ばかりに
見ゆるまいりて行也。一里ありといふ成瀬隼
人正の居城也。犬山の城れハのさハを本岩
川あり○後拾遺集東の方へまかりけ



かるぶうる渡といふ下にて源ゆきさだ一樹に
こゝとうる渡といふ又ハ行ふ人のあれハな
つまらるよわり。着よりうる渡といひける
まや○犬山の南の方小牧へ三里。小牧ハ
むかしゟ行在する所也。犬山と小牧の間
小楽田といふ所あり。犬山より南一里半。小牧
の北一里半ばかりなる所。宿の名よハあらざれど。
これを民家ありて町すくなくある。小牧より楽

田を秀吉公の陣所也。小牧ゟ名古屋へ三里あり。鵜沼よりなごやへハ七里あまり ○鵜沼より西の方ハ路中に籃輿あり。是より東江戸日光までの間ハ籃輿なし。但上州の坂本よりハ籃輿かゝる。是ハうすひ嶺あるゆへ也。鵜沼の西はれるまより西り廣き野あり。各務野といふ。げしハ各務郡なるべし。野の中に各務と云村あり。各務野ひろさ三里四方ありと云。但東西ハ三里たらず。南北一里半程ありとみゆる。此野ハ田畠なし。すべて浅茅のミ生じ。野の南に三井山と云山あり。其南木曽川のきハまで野あり。○新加納て加納ハ東一里半ほどあり。小なる町あり。鵜沼より加納への道也。昔長井手波岐阜の勢と味方諸大将と合戦の所なり

加納 厚見郡より合渡(ごうど)へ一里半
加納の町長十八町程有。今は安藤右京
亮殿居城也。加納より西は平田多く野の
宅多し。故よるの草多し。田畠よまんぞ
むしろの事を植くるの事すさむ
筑紫よりそいは宝花と云。又ぎふよりて田乃
ごとしらす。是より名古屋へ八里。岐阜へ
一里あり。岐阜は是より北にあたる。岐阜



へよるはまかりに一里余あり。地は岐阜
の町は人家多くしてひろき所也。富る商
人多し。少しゆくし。岐阜に稲葉山あり。
爾なり古寺あり。かり縁年の立わるまじい
かんの山と云ある。峰ふかりといべき。
因幡乃河の寺名とれて因幡の山に
なるべし。はいならよいをしじ。ふりくに
因幡の所件る大社なり。

此地の京ハ京都の清水によりて。西山とも呼に
よく似たる京なり。すべて此山の京甚し。
岐阜の地最佳處也。京都の風景のごと
し。是地も小石満しづまりて京都乃地のご
とし。岐阜の山城ハたぐひなき名山といふと
いへども。就中周囲の社れ上の山也。嵩に
松多し。岐阜ハ周の岐山よりいでゝ名
付しと也。昔斎藤龍興が城也。それはまで

ハ稲葉山と云。信長公うつりすみてより
岐阜と云。厚見郡也○信長公の城あとは
いなば山の山上にあり。城乃大手ハ西向なり。
城山そのしたにハ千畳敷の跡をきり。城下
に今ハ濠の跡のこれり。町の外郭
外土あり濠あり。信長公の時乃城のう
まへなり。信長公ハそのゝち小牧城し給
ひしが。天正四年近江の安土の城に移り給ふ。

其後信長の嫡子織田城介信忠の子。
中納言秀信此城に居住ありしが岐阜
中納言として弱年なる故慶長五年石田三成
に与して此城東照宮の御ために
は責落さる○岐阜乃西北川とも稲
川とも云。川上にも稲といふ村あるゆゑ也。
岐阜乃西のかた上より流れて河内よりわきまで
てながる。岐阜の方よりながるゝは枝河に

て西の方とながるゝは本流にて
大かわり岐阜の方へは東の方よりながれ西方
とよれも稲川と云。合渡乃十町ばかり
川上稲葉のかたより出て西川へ合てな
がるゝ故に合渡と云。上のわたしと云を
渡より下の流合所まで一里許あり。
ふるは中流にて七村也。岐阜より合渡
へ行には稲川にそふてくる。此川に

鮎鮨わかし。舟にのりて鵜をつかふ。此地の鮎
江戸へも献ず。慶長五年関原陣の時。
八月廿三日岐阜の城を攻し時。大将の
城より敵出てすくはんとして。合渡の川
の西まで寄来りける所。此方の諸大将
川をわたして敵を追ちらしける。合渡
乃宿れむしに合まうけといふ村まで。敵此
ところよりかくひく居たりしと云。合渡

川は舟渡し也。深さ十尋にあまるところ也。
我此川をわたる時。舟のよこはゞ三間乃
竿をさすにもとゞかず。川のながれはきよ
くわかり。洲の股川乃河上也○岐阜より
合渡へ三十町あり。西美濃に行て加納乃
宿に出。それより湊の町にいたる○岐阜の
北に席田といふ所あり。郡の名也名所也。
又岐阜の北三里許川上に岩田の山稍

あり名所なり
合渡より美江寺へ一里六町
合渡の町家数三十軒ばかりあり
○いとぬき川ハよにふるき名所也古今
集に席田のいつぬき川とよめり。席田
の郡より出る川也。本田と云村乃辺なり。
大河なれバ里の人ハいとぬき川と云
美江寺より赤坂へ二里八町

美江寺の町家数六十許あり○美江寺
乃北半里に真桑村あり。此地より瓜の
多く出る所也。真桑瓜といふ。ごとくに菓
遠くまで真桑瓜ハ小瓜なり。只一種あり。
せうより毎年瓜の江戸へ献上さる。
真桑ハ町なし。松林乃かたハらにあり。
大河よりミゆる也○呂久川ハ美江寺より
五里北の方也。千載集に詠あり。

山中にく尊くおはさし順礼(じゆんれい)の札(ふだ)をも
おさむる西国三十三番の観音あり○
呂久(ろく)村より呂久川とて大河あり。くいせ川
ともいふ。安八しも合渡川よりハ水たかしと
いへども。源(みなもと)深くして川の流(ながれ)すこし。瀧澤山
の三方高峰乃郡上(ぐじやう)より出る川也。しばし里
下と佐渡(さわたり)川とも云。佐渡村ハ川の西にあり。
佐渡川乃東に結(むすぶ)村あり。大垣(がき)より湖(みを)の

股(また)ハ紀れてこの山に小社あり結の杜と
いふ富遠也右の所也是も呂久より半里
下也○沢尻村ハ右の方にあり
赤坂より垂井(たるゐ)へ一里十二町
赤坂の山虚空蔵(こくうざう)山に虚空蔵堂あり。
赤坂乃宿ハむかし熊坂(くまさか)乃長範(ちやうはん)が源九郎
義経(よしつね)にうたれし所也是又其年東方
の南表陳墨山ハ赤坂の南にありひきく



山なり。大垣の方からハ山にミゆる。此附緒
山と名を改させられしより今も明山
といふ平常ハ今も 御殿あり○墓(はか)あり
むかしハ垂井赤坂と同く宿駅(しゆくえき)也。今ハ小
里なり町なかしてたの所也右の方に長者が屋
敷の跡としてあり。照手(てるて)姫の社ハ青墓の西
北乃方小野の谷乃あたりにて海道より四五町
あり。これ照手ハ八幡として此ふもとの山より照

長の墓あり。其墓のむかふに野村あり。
是ハ青野が原也。古歌多し。熊
坂の長範が物見の松とて大なる松あり。
赤坂よりゆけバ東にミゆ。垂井より行
バ西にミゆる。垂井のおもて川を隔て大
垣の方也。赤坂乃方。本巣郡の谷汲へゆ
く道しるべあり。
垂井より関ケ原へ一里半

垂井の宿を南に小嶋といふ所あり。兼良公の
藤川乃記に曰。文和の比後光厳院南軍を
恐れ給ひて。小嶋に行幸有し所也。
民安寺といふ律院に行宮をなし給ひしと
なん。○二条良基の小嶋のすさひといふ
書も此時供奉せられしものとぞ。又
あり。足利義詮も此時小嶋の皇居をまも
護し給ふ。垂井より宮代ハ南也。古今にも。垂井

の宿れ南に南宮山あり。美濃の中山と
いふ名所也。不破の中山とも云南宮乃
うしろにもひろき谷あり其谷の中に
あるゆへ中山と云ぞ。又御社山とも云南宮
乃社背面へなり。社ハ山の麓にあり大社
なり東よりむかへり。鳥居より金井の所
中の南にあり。其宮ハ正一位勲一等
金山彦大神とうまり。社僧十二坊。社人

十二人あり。其外小なる社人数多し。社
領三百石 公儀より御寄附と云關ヶ原
陣のとき。安国寺家に陣をしかれしゆへを
焼うしなひたるを後 大猷院公乃御時。
御建立あり。今その附のまゝ也○多芸山
ハ南宮山の東南にあり。それより山すて嵩し
伊勢の多度山よりつづきり。尾越乃方よ
りミれバ見なるかぐつきする山也

○養老の滝ハ美濃国当芸郡多度山
にあることハ續日本紀に見えたり多度
山乃たうげにあれバ美濃の名によるべし下
よりひろき路あり。又ひろき路の上也。
山のある所也○栗原山ハ南宮山の
東北也。南宮山よりつゞきたり。かひさ
しもとに栗原村あり。関が原のと
き長曾我部土佐守陣せし所也○野

上の里名所なり古ハ駅なりし今ハ民家
かゝこご玉井と関が原のあひ也。是も南に
鶏籠の山とてあり。野上に西に桃くば
り山と云野原あり。此家二三軒ある所
乃ひがし也。天武帝も野上に陣しまします
関が原より今洲へ一里
関が原の東北に井手山あり。是も藤竹
中氏乃陣所也。盤ミのそくれ名の中に

菩提といふ寺ありし所也云の地竹中半
兵衛重治の居城也○関が原の名
南北乃ひろさ凡八九町程よこゆ乃よ
里南山の下海道谷四町余もあらん
ゟ町の東れ跡は数千年かあまりくれ
木もなくてすゝきや原なりしが今ハ
林のごとく木どもも多く生茂れり○
関が原れ町の中北の方に八幡宮あり。

平家の為に即越前の燧へ向ふ北國
海道なりしところを行く八幡の社乃後
乃跡。関が原陸の前乃合戦場也。小関
村と小出へ行乃前にて。関が原へ近し。
小池村は小関村のかたはらに関が原
の西よひくき山三並ぶりて其南のこ
石山を天満山と云○松尾山ハ海道の
南にありて道よりかたをし関が原の西南

の方也。関が原合陣のとき。筑前中納言
秀秋の陣所也。此山よりて陣をとられ
しゆゑ。山上に城あとのごとく見ゆる。こゝは昔ハ
不破河内守居城なりしと云。○南宮山の
南。多波山の此を通る路あり。南宮山
と多波山との間也。此谷ハ関が原北谷
おひよりひろし。其上方より商人の東
へくだるには。今洲より関が原へゆかずし

て。関が原の西より南へ行東へゆく。
牧田と云宿。今洲より二里有。故に此所
を牧田かいどうと云。牧田の東に有南と云
宿まで。その南に市有。高須と云所也。大
垣の南也。高須より河船に乗。桑名へも
宮へも行也。京都の商人などハ荷物を
江戸へくだすとて。此かいどうをとほりて
今洲より高須まで六里あり。関が原

軍の前乃東。大垣の城乃敵陣中にゐて。
いくさ小関が原乃西へ退きしハ此所也
と云○大関村ハ関が原の町より三町ばかり
西也。是ハ不破の関乃有し所也。大関村
の西北たる山間に川あり関の藤川と云いづ
れも名所也。俗に若子川と云○南宮山
乃西南に多羅山あり。ちかくを土岐多
良越と云。近江の日野山の方へ越る道也。

関が原陣場近し附。鷺津度追て渡り成
なり○関が原と今例の宿れ間よ山中
乃里あり。源の義経の母常盤御墓あり。乃
の小森ある所なり○伊吹山ハ近江
乃境にて名所也。伊吹の里ハ近江也。山の
西北にあり。是も名所なり。むかし天武天
皇の兵と。大友の皇子の兵と戦有し
此不破の関也。大友ハ皇子縁に打まけ

かしは天武天皇帝位に上りたまふ清見原
の天皇是也是又年号白鳳を定めらる。
天下を治めたまふも此地也古今たゞふ一天
下安己のいのりし地也又兵船十三艘の
財宝数乃戦に新関て関東へくだり給
ひしと平家の士伝平岩来が行末にひて
生捕しし関が原なり
今洲より柏原へ壱里

今洲と柏原の間に長久寺といふ小里
ありて是を居し近江のさかひ也東が七
たらはば当所より家をならべ伝りなくべ
きなれば小溝をひとつ隔てゞ国をつゞ
て寝物がたりをするといふ也ぱじゆへに渉
理を称ものがたりとも云
柏原 江州坂田郡 是より以下近江 より醒井へ壱里半
柏原の小六里に小宿とりまぎゆる。

山下に小野と云所あり。小町出生の宿也。又
は鎌刃也。むかし浅井備前守居城也
醒井より番場へ壱里
醒が井の宿は山中也。此所に川あり。是ぞ川上
みつ屋村に醒井より八町に鴨乃岩
明が岩一首あり。此所にてよめるうた。又
餘湖のうきれ高ふも里面村に醒井
の宿は古来名所也しむかし日本

武尊東征し給ひし時。伊吹山にて大蛇
を踏て通り給ひしに。山中にて毒霧
にあてられ給ひて。くるしみ給ひしが。尊山をお
りくだり給ひ。此清水にてくるしみをさまりて。此
みをのみて。即醒給ひぬ。是によつて醒
が井といふ。尊の腰かけ石あり。日
本武尊ハ景行天皇の御子。仲哀天皇
の御父なれど。八幡の祖父なり。醒井を

長浜へ行程あり六里也。長浜ハ湖の
ところなり。町也秀吉公も住給ひし城
跡ハ寺に居るのよし
番場より鳥居本まで壱里十町
むかし番場ハ今の番場の宿の西にあり。
湖のきはに米原といふ所也。大津。海津
塩津へこゝより舟出ればよく湊たり。大津今
米原まで舟路十六里あり。米原より



今の番場に遷るなり。此故よりて番
場の町を今の番場にうつして立しなり。
米原へ一里あり。米原より鳥居本へ壱
里半あり○摺針嶺ハ番場と鳥居本
乃宿の間にあり。湖水眼下にみゆる
好景也。竹生嶋ハ是よりいぬゐの方にて
はるかに嶋のまはり一里あり。めぐりハ皆屏
風をたてたるごとくなる岩也。社あり。僧

塔あり。在家(ざいけ)ハむかし。此湖の中に三(み)の嶋(しま)
あり。竹生嶋ハ北の方にあり。南よ奥ハ沖嶋(おきしま)
竹嶋とて又奥(おう)山とて武佐(むさ)の宿(しゆく)のいぬい
の方(かた)に湖(うみ)の中にさし出(いで)たる山あり。これ
又嶋のごとし。かの地よりはぐくり磨針嶺乃
下に入海(いりうみ)ありて西南に民家あり。磯(いそ)
といふ。是より沢山の方へもゆくなり
鳥居本より高宮へ一里半



昔ハ此まで多賀明神の鳥居(とりゐ)ありしゆへ
鳥居本といふ。沢山(さは)乃古城(ふるじろ)へ鳥居本の西
にありし是きれ山也。石田治部(ぢぶ)が城ある也。
関が原軍(いくさ)の翌日(よくじつ)。此城を攻落(せめおと)す。彦根(ひこね)の
乃城ハ手西にあり鳥居本中より彦根へ
行ハ沢山乃古城の山を越(え)行(ゆく)也。鳥居本
より彦根まで一里に近(ちか)し。彦根ハ湖乃
島也。夫木集(ふぼくしう)に。綱(つな)行(ゆく)舟の乳母(めのと)が

云あり。関が原陣乃後、沢山の城ハ治
部少輔が所持を井伊治部殿ニ出ニ彼ハ
其後慶長九年沢山の城不宜とて。
彦根に移して城を築しめ玉ふ。是ハ治部
殿死去の後なり。高宮より鳥居本
乃間七里八山中なり。小野の宿ゟ鳥
居本ところ高宮の宿にあり名所也
高宮より愛智川へ二里

高宮より多賀へ一里あり。高宮ハあ
多賀ハ多賀大明神乃社あり。伊弉諾
尊也。乾緒とはいふの神なり也。高宮ゟ
彦根へも一里あり。高宮の町ニ布と
多く出ゟ高宮より愛智川乃宿にて
ちぢみ有り村しらぬ一両あり。高宮のごとくは
つぎ行多く織りてぞ出ゟなり。
高宮の町乃西の出口ニ川あり。犬上川

と云也是ハ和之の郷なり〇是より西
の大山を和田山といふ。こゝの山を荒神
山といへり。こゝより高き山城いふ所は
こゝの山ハ観音寺山なり。こゝより箕
作山也。是皆江の国中にてよき山也。百千
九院と云所にあり
愛知川より武佐へ二里半
ゑちかハの宿の西にある川を愛知川といふ。



後村の前あり。観音寺山ハ愛知川と
武佐乃宿のあひだにあり。山の南の方乃麓
を石寺といふ。こゝに観音堂あり。三十三
所乃順礼観音なり。宿坊九ヶ所あり。観音
堂より上に佐々木の城跡なり。代々
家の居城とし此城の大手ハ南方にあり。
観音寺山のひがしに凡六町ばかりに箕作
の城跡あり。最たかき所なり。是ハ佐々木

義秀の一族。佐々木義禎が居城なり。
観音寺山といふ。是も高き山也。建部の神
は箕作山の東にあり○老曽の
森は老曽智川と武者の宿のあふみに観
音寺山の麓なり清水と云所の前に
あり。海道のかたはら也。老曽村に所あり。
此あたりはとりしいつものあれも地を
ふくめてとなく。墨のごとく、染は葉の





くろきに似たりごも中に木の穀の有
まはりの火を付れば、よくもゆる。里人これ
を採て薪として、火をよくたりつると云。里
人これをもちいれ栗の木の葉なりとも
いふ。ふしき物也。他所にもあまりれは
物あり。昔は此に入たる栗の木の葉なりし
と云。續酉陽雜俎に、東海に大栗あり
といへり。其は栗の事なりとも、人あり。

安土の城跡ハ観音寺山の北にあり近し。観音
佐々木大明神の社ハ安土にちかし。観音
寺山乃城戌亥方にあり。佐々木氏代々
尊敬の神也。延喜式神名帳に。近江国
蒲生郡沙々貴神社とあり。安土近く佐
々木の社なりといへど。佐々木明神
ハ大さゞれの名るをまつれる故に名つく。
是仁徳天皇也。佐々木氏ハ宇多源氏

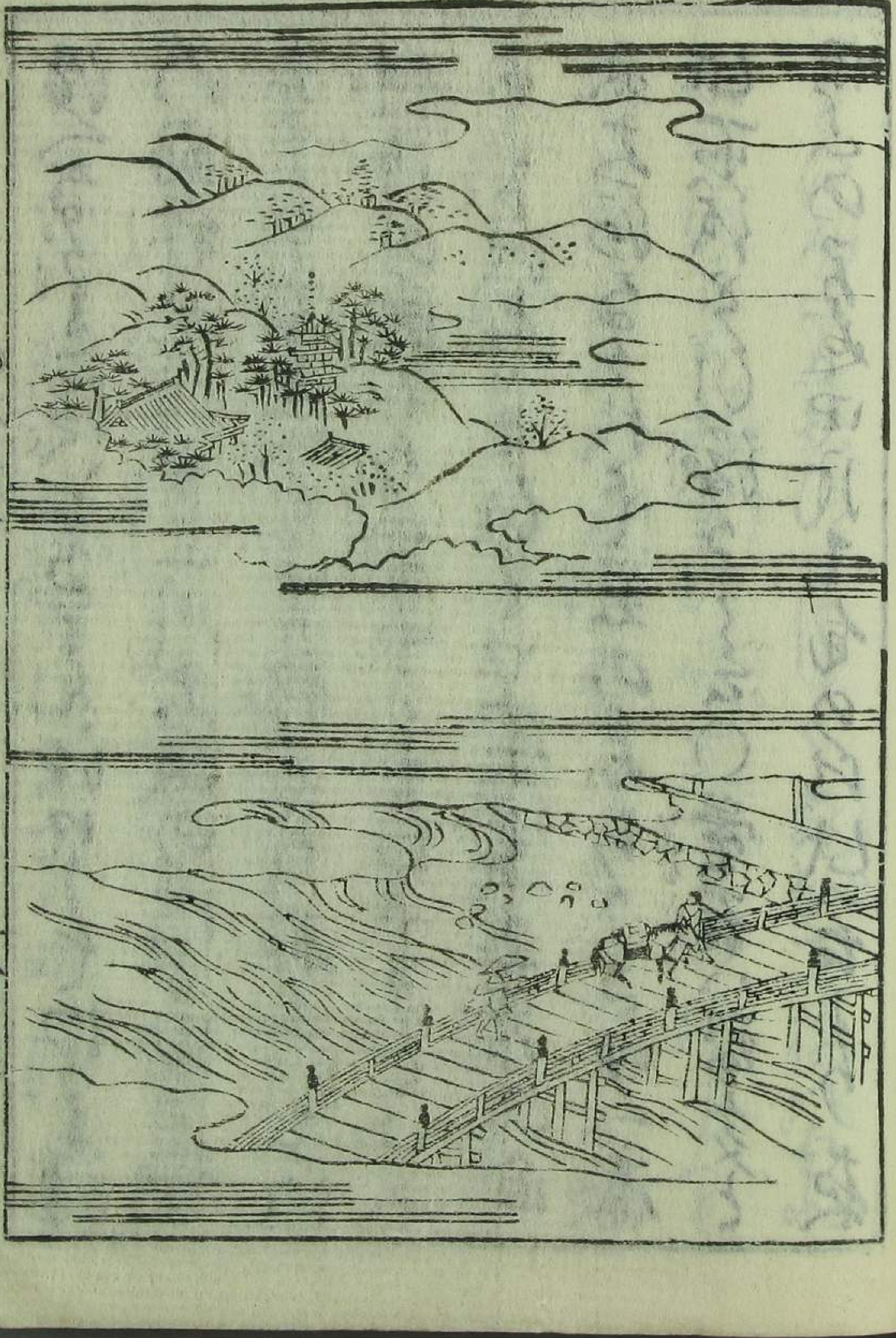
なれバ。その祖神にハあらざれども土地乃
神なるにて佐々木氏尊敬ありし也
武佐より竜山へ三里半
鏡山とて武佐と竜山との間にあり。西
乃方よりむかへバ鏡をたてたるごとくな
るハ鏡山といへり。かゞみ宿ハ山下に鏡の
宿あり。人家おほからざる続にあらざれど
もこゝにかくることおかし。武佐より

鏡まで一里半。鏡より守山へ二里あるなり。
武者より八幡山へ五十町あり。武佐と守
山の間。横関といふ所に川あり。舟渡なり
○野洲川ハ鏡と守山との間也。鏡乃宿の
西よりありし町のすゑをながれゆきて布を
多くはしもて、やすと川八町の流れしけるとなり。
野洲川の水ハ野洲のさとより出也○彦根へ八幡より今
彦根へゆくに彦根より八幡へ三里なり。

それより野洲に出る海道あり。是を
江の下道といふ。平地にして紀の道沙地
なり。列樹の松あり。将軍家御上洛のと
きけば右をとほらせ給ふ。朝鮮人も毎度此
道をとほるなり。彦根へ一里半
根より八幡へ六里。八幡より守山へ三里半
あり。彦根と八幡の間に安土あり。信長
公の城跡あり。安土は今も町なり。在

家あり。信長公の城乃屋敷あとひろし。
八幡と野洲のあはひ。武佐より八幡へ行所あり。
八幡八町ひろき事大津に続たる所にて。
富る商人多く。諸の商家京都より多
く来り。万潤沢にして繁昌なる所也。
町乃中よ八幡山あり。秀吉公の甥子秀
次の居城なり。秀次を近江中納言と
称せしも。寔に居城ありしゆへなりし所

よて蚊帳をおほくあり染て候。京大
坂江戸へも寔分積らるゝ也。凡日本国中へ
うる蚊帳。おほくハ寔より出るといふ事
より武佐へ二里あり。武佐よりなる越
智川へ三里まで。是も同じく続く大田部
乃社あり。是ハ皆中道の方へ出る石の
鳥居也。下道ハいつれにもあらば
守山より草津へ三里半



篠原の里ハ守山と草津の間にあり。
又しるべに野洲あり名所也。野路八幡
はし大津ハ名所なり。是より比良の
高峯。比叡山。八王子。堅田のかたなど
みゆる
草津より大津へ三里半六町
勢田の橋の下の川ハ。近江国中の水にて
とゞく湖よりこゝの末流也。是より宇

淀へうつりて淀となりて江口にいたりて河尻まで津
乃国神崎川十三川大坂の川にいたる勢
多より宇治へ十里余あり。宇治山の下に
供御の瀬あり歩わたりもなるといふ。
其下にてとびといふ巌岸の間
より大河落るゆゑ岩の上ちるさゆへ魚
とびこゆると云○蛍谷は勢多と
石山の間也田川下手のはしより東

ごとに光る灯ちらしく飛あがりて橋の欄
干にびらびら数万の蛍一所にあつまり
丸くかたまりて空にあがり又かさなりて川
の上に落てちらはといふ。毎夜かくのごとし
合戦と号す。又川下へくだる。宇治にては
五月上旬の比蛍多く来る事也といふ
○勢田より大津の札の辻まで一里半湖
上大津松本膳所はしより三所は町はづれ

さゝ浪やうにく別なり。勢多と膳所の間
粟津が原也。今井四郎兼平が墓あり。木
曽義仲乃墓ハ膳所の民家のうしろにあ
るの畠也。榎の木二本を志るしにす。これ
よれゝ濱膳所まであり。山王乃神會を網
承所也。旅まつりの濱とも云。又膳所とも云。
松本の邑湖のさゞ分。比叡の山坂本八
王寺堅田志賀唐崎れ一松。三井寺乃

上の長等山なとも見えて好景也。大津乃
東ゟ此湖の邊。打出の濱なり
大津より京へ三里
大津ハ水陸乃要地なり。北國奥羽出羽
より京へ上る諸用の荷を船よのきそて。
越前敦賀へ往らいし。敦賀よりこゝ舟
て荒乳山七里ゆれ山路をこえて近
江の海津ま出し。船よの也湖上二十里を

るく大津へ急ぐ又東ハ江西ハ白川
これよりも此地よ駅なれバ名にさへし問屋
町富家軒をならべ札の辻より北よ行バ
小関越あり三井寺へ詣る観音比叡山へ
も道よりゆくなれ乃辻八町の坂長等にさ
りきさる道○八町坂の右よ関乃明神
あり此神ハ蝉丸なりと云ひならはし
社乃前より小関の清水とてあり組古

人の跡よい関の清水ありて西よりあ
ばくら尺くらり左社の方に関寺ありさきよ
りし相坂の笑おりし所あり此上の山
いあふさか山と関乃小川も此あたりなん。
家隆の歌に志ちおりたる紙あふさかの
し凌ゆく関乃小川の流れまつ清 経家
の歌に 石井よ関の小川ハ流よ音
羽乃ふるまもみち散し関山しらへと相

坂山あり名所也○大津と追分にいたる大谷といふ所よ。これより井あそて南の方より
み流れ出る井也○それより山城乃境は
大津と追分の間。追分より東一町ばかり
走井の前三町にあり。是より三十三ヶ所
東三十三ヶ所の境なり○追分は京と
伏見へゆくちまた也。町あり○追分より
南は方に牛の尾山あり。音羽山とも云。



なを上りゆけば音羽の滝ありて音羽
の瀧三丈ほど也。此地は清らなるところ
嚴山といふあり○山科の里はすべて八郷
十八村あり。東南は大谷より日の岡まで
一里余也。北は御廟野より南一里余也。
すべて方一里余あり。宇治乃郡なり
○大谷の南に十禅師四の宮河原
大明神の社あり。小関越へゆく道也

あり是より北へ越ゆけハ三井寺の道へ出る也○山科の内に御陵村といふあり天智天皇の御陵あるゆゑ此辺の郷を御廟野と云御陵の附京都町との境也とも皆山野に御遊に出て行衛しれず○其の坂の上を日の岡といふたうげまでを過ぎ京の方へ下る坂を松坂と云○うしろ坂ことをいふ不詳

乱世にハ爰にて山賊人を殺し衣財をうばひしとぞ今の時ハ白昼にも一文人ハ行がたかりしとなん○松坂に義経のけさかけの松あり○粟田口京より東の出口なり左に青蓮院御門跡あり左の山上に将軍塚あり是より北へ行ば南禅寺黒谷吉田白川乃方にゆく所なり。粟田山ハ名所なり。

○白川橋は川を白川より出る也。此り
知恩院祇園清水へ行道あり○三条の
大橋是より東へ入なり。此川ハ加茂川
乃下なり○日の岡は東山科乃関の
東方へ行。又西乃方へゆき山城越ゑく
粟田口又条も条への所ありする名
越と云坂あり是を苦集滅道といふ。
京北中山清閑寺清水坂下をいふ



○追分より東へゆけど御見ふゆく〔判読不能〕。
勧修寺ハ其菓屋を通る。俗に此所ハ
大亀谷といふハ非なりゞ菓こしかどう
なるなりゞ其北乃方に勧修寺御門跡
あり山門跡の東ゞ菓屋北の石ハ行くと
いふ。是道は醍醐山まきの小社あり。
〇〇延喜帝の外祖父母なりし堂
八字治物語よみしらず為の坂と越行

八幡の森乃社の南横通りて佛らんまへ出

| | |
|---|---|
| 庄野 | 長谷紋右衛門<br>沢田八左衛門 |
| 石薬師 | 園田庄兵衛<br>岩田市右衛門 |
| 四日市 | 西村庄左衛門<br>行方小左衛門 |
| 桑名 | 三宅孫右衛門<br>大塚伝左衛門 |
| 宮 | 稲葉源六郎<br>大森作左衛門<br>浜村善右衛門 |
| 鳴海 | 児玉源右衛門<br>西尾長右衛門 |

| | |
|---|---|
| 石薬師 | 園田庄兵衛<br>岩田市右衛門 |
| 四日市 | 小沢惣右衛門<br>清水太兵衛 |
| 桑名 | 大塚与六<br>丹羽嘉九右衛門 |
| 宮 | 森田八右衛門<br>南部新五右衛門 |
| 鳴海 | 西尾伴右衛門 |
| 池鯉鮒 | 永田清兵衛 |

池鯉鮒
岡崎
藤川
赤坂
御油

丹羽助七郎
荻野善六
梅に与兵衛
鈴木庄右衛門
石原弥右衛門
杉原庄兵衛
粟生源兵衛
伴田与五兵衛
平松彦十郎
林弥太夫

岡崎
藤川
赤坂
御油
吉田
二川
白須賀

中根甚太郎
服部九右衛門
天野弥右衛門
赤坂彦十郎
林弥太夫
鈴木半右衛門
中西太右吉
山田新右衛門
後藤五右衛門
鷲田清三郎
大村庄右衛門
佐藤源右衛門

吉田
二川
白須賀
新居
舞坂
浜松

中西太右吉
林 縫殿之助
紅林武右衛門
後藤七兵衛
大村庄右衛門
佐藤源兵衛
疋田弥左衛門
廣中佐右衛門
小澤 仁右衛門
文蔵 又平
仁蔵 杏左衛門
小左衛門

新居
舞坂
浜松
見付
袋井

疋田弥五助
飯田武兵衛
疋田八郎兵衛
宮崎伝左衛門
源馬太左衛門
源馬十兵衛
梅屋市左衛門
杉浦助右衛門
神谷三郎右衛門
鈴木孫兵衛
田代八郎右衛門
太田八郎

見付　佐々木六左衛門
袋井　佐々木六左衛門　田代八郎右衛門　吉田八兵衛
掛川　鈴木九右衛門　福地左五兵衛　林喜兵衛右衛門　村松宗右衛門
日坂　片岡清兵衛　同　十兵衛
金谷　河村市右衛門　山田弥太夫

掛川　沢井孫三右衛門　林喜多右衛門
日坂　片岡清兵衛
金谷　柳屋八郎右衛門
島田　大久保新右衛門　置塩藤四郎
藤枝　村松九郎次　青嶋次右衛門
岡部　村松庄右衛門　内野九兵衛　仁藤猪次郎

島田　大屋六兵衛
藤枝　三浦平四郎　橋本喜兵衛
岡部　幸島久兵衛　小林平兵衛
丸子　横田七右衛門
府中　松永孫九郎　小川久右衛門
江尻　寺尾与右衛門　羽根半左衛門

丸子　横田三右衛門
府中　市川次右衛門　秋原平右衛門
江尻　寺尾与右衛門　羽根半右衛門　橋本喜兵衛
沖津　市川新右衛門　手塚十右衛門
由比　岩辺八右衛門

沖津
由比
蒲原
吉原
原
沼津

鈴木武兵衛 手塚十郎左衛門
岩邑江左衛門
由比太郎左衛門
常若右衛門
荒金又兵衛
神戸佐助
村井七郎兵衛
内田三郎左衛門
清水橋右衛門
ミヤ戸右衛門
上本陣 新井長左衛門
中本陣 鷲田惣右衛門
下三枚橋 清水本陣長左衛門

蒲原
吉原
原
沼津
三嶋
箱根

平岡久兵衛
多芸綾右衛門
長谷川八兵衛
神尾六右衛門
渡辺平左衛門
清水助右衛門
高田喜右衛門
樋口伝右衛門
世古六大夫
天野平右衛門
又原源右衛門

三嶋
箱根
小田原
大磯
平塚
藤沢

萬茅伝右衛門
小沼吾右衛門
天野平右衛門
石内源半寺
清水助右衛門
平井三四郎
清水与右衛門
小嶌源右衛門
平田惣兵衛
吉家源右衛門
堀内七右衛門
和田七郎右衛門

小田原
大磯

門田理右衛門
川田覚右衛門
柳屋伝右衛門
蓮金屋七郎兵衛
清水孫右衛門
久保田七右衛門
横田若四郎
高橋清兵衛
尾上市右衛門
石井又兵衛
小嶋才三郎
平塚ニ本陣なし

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 戸塚 | 程谷 | 神奈川 | 川崎 | 品川 | |
| 後藤左衛門 / 菖蒲沢宗右衛門 / 吉田清兵衛 | 苅部清兵衛 | 鈴木源左衛門 / 石井弥五兵衛 | 稲波源太郎 / 鈴木徳左衛門 | 岩田吾兵衛 | 宇田川吉三郎 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 藤沢 | 戸塚 | 程谷 | 神奈川 | 川崎 | 品川 |
| 蒔田源左衛門 / 堀内新右衛門 / 沢辺九左衛門 / 沢辺八左衛門 | 苅部清兵衛 | 石井源左衛門 / 鈴木源左衛門 | 田中兵庫 / 根本惣三郎 | 佐藤惣左衛門 | 岩田茂兵衛 |



波邇路紀乃後叙

波邇(キン)路いう経くきこしよりも道けむしかしこうけたしたまあれとちかとあやうし波大井川阿部川たゝのうこ紀渋(コツズイ)のまそこえうこ紀下乃うまひれく文章名新(アラ)に(ニ)なてのこくたる渡海(トカイ)しためこるしうまひたらけよりる籠(コメ)まそ後徳

の内四十七里ハ山中なるゆへ坂多
けれと箱根のことくけはしき所なし
山中なれはやへの心とされさり
たるひまもなくおほしのもて殊に絶
方よくふれハまめやかにいよあつく
所ころも器もけうらハしかりしを山
川のうら林木のさうら続列ますく
まうはいしらて用ゆる周紙よろこ

ハし世行人すくなくして往来まれ稀
なれハ道の中いそうハしかれハ之
はかなき又人馬のちらしなしれ故
竹輿の内なる鞍ゐとおもやうなうして
わやうなかれ只十一二月正二月ハ雪
ふりして行かしかま江戸より行
こと十度皆東海道をゆきゝ人
まれのちれく人なされむもの多ハ左

ひ夜又さめへきものゝたくては
しめそしけ道をしるへりもりし又
おもひうけをよれ及し志りねき聞
見ゝに見聞をし而経いさうか後乃
こひくふきんとて望ゆきふうれ
人よまりて○て書志わし仍へる我
一人のうんをいふのゝわくさわいも
まてる事したらひさるる事おかり

らんいうる絶し後のこゝに人能道
乃こと紙志れくハそれおちさう紙
ねとさむひ寄まう人ふをたとけめん

寶永六年八月

貝原篤信書

# 木曽海道宿付

まだちんへなかちん二銭の積三つまりての分也
宝永四年ヨリ二割まし

| | | | |
|---|---|---|---|
| 江戸よりいたはしへ二り | 七十八文 | 板橋よりわらびへ一り余 | 卅二文 |
| 蕨よりうらわへ一り近し | 廿九文 | 蕨よりうらわへ一り半 | 四十五文 |
| 浦和よりおほみやへ一り十丁 | 四十二文 | 大宮よりあげをへ二り | 六十四文 |
| 上尾よりおけがはへ一り | 卅二文 | 桶川よりかうのすへ一り卅丁 | 五十九文 |
| 鴻巣よりくまがへへ四り八丁 | 百卅九文 | 熊谷よりふかやへ二り廿七丁 | 八十八文 |
| 深谷より本庄へ二り二丁 | 四十五文 | 本庄よりしん町へ二り | 六十二文 |
| 倉賀野よりたかさきへ一り | 卅八文 | 玉村よりくらがのへ一り半 | 五十一文 |
| 藪町よりたかさきへ一り十丁 | 四十四文 | 高崎よりいたはなへ一り半 | 五十三文 |
| 板鼻よりあんなかへ一り | 卅五文 | 安中よりまつゐだへ二り | 七十六文 |
| 松坂よりさかもとへ二り | 七十一文 | 坂本よりかるいざはへ二り半 | 百六文 |
| 軽井沢よりくつかけへ一り | 卅八文 | 沓掛よりおいわけへ一り | 廿八文 |
| 追分よりをだいへ一り半 | 卅四文 | 小田井よりいはむらたへ一り | 卅九文 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 岩村田よりしほなだへ一り半 | 四十四文 | 塩名田よりやはたへ一り | 廿七文 |
| 八幡よりもちづきへ一り | 廿八文 | 望月よりあしだへ一り半 | 卅九文 |
| 芦田よりながくぼへ一り半 | 五十文 | 長窪よりわだへ二り | 七十一文 |
| 和田より下すはへ五り | 二百五十文 | 下諏訪よりしほじりへ三り | 百卅三文 |
| 塩尻よりせばへ二り | 六十一文 | 洗馬よりもとやまへ一り | 卅文 |
| 本山よりにへ川へ二り | 七十七文 | 贄川よりならいへ一り半 | 六十一文 |
| 奈良井よりやぶはらへ一り半 | 六十三文 | 藪原よりみやのこしへ二り | 七十一文 |
| 宮越よりふくしまへ一り半 | 六十四文 | 福島よりあげまつへ二り半 | 百十四文 |
| 上松よりすはらへ三り九丁 | 百廿七文 | 須原よりのじりへ一り半 | 七十二文 |
| 野尻よりみどのへ二り半 | 百五文 | 三渡野よりつまごへ一り | 七十文 |
| 妻籠よりまごめへ二り | 八十四文 | 馬籠よりおちあひへ一り | 四十四文 |
| 落合よりなかつ川へ一り | 四十四文 | 中津よりおほゐへ二り半 | 八十四文 |
| 大井よりおほくてへ三り | 百四十九文 | 大久手よりほそくてへ二り | 五十九文 |

〇木曽路

| | | | |
|---|---|---|---|
| 細久手ゟみたけへ三り | 百十四文 | 御嶽ゟふしみへ一り | 三十五文 |
| 伏見ゟおふたへ二り | 七十七文 | 太田ゟうぬまへ二り | 七十七文 |
| うぬまゟかのうへ四り | 百卅八文 | 加納ゟごうどへ一り半 | 五十五文 |
| 合渡ゟみゑじへ一り六丁 | 卅九文 | 美江寺ゟあか坂へ二り八丁 | 七十一文 |
| 赤坂ゟたるいへ一り十二丁 | 四十二文 | 垂井ゟせきがはらへ一り半 | 五十一文 |
| 関ヶ原ゟいますへ一り | 卅五文 | 今須ゟかしハ原へ一り | 卅五文 |
| 柏原ゟさめがいへ一り半 | 五十一文 | 醒井ゟばんばへ一り | 卅五文 |
| 番場ゟとりいもとへ一り十丁 | 卅七文 | 鳥居本ゟたかみやへ一り半 | 五十三文 |
| 高宮ゟゑちがハへ二り半 | 九十四文 | 愛知川ゟむさへ二り半 | 九十四文 |
| 武佐ゟもり山へ三り半 | 百廿九文 | 守山ゟくさつへ一り半 | 五十二文 |
| 草津ゟ大津へ三り六丁 | 百廿九文 | 大津ゟ京へ三り | 百卅二文 |

荷物御定　壱駄荷物三拾六貫目迄
乗懸下　十八貫目ゟ廿貫目迄　軽尻荷附　二〆目ゟ五〆目迄
人足壱人持荷物五貫目限　人足壱人乗懸荷物三拾貫目迄
次第増ハ乗懸三拾六貫次第ハ乗懸三拾六貫

秋四

頭書
重宝 日用書状文
新版
二ッ切摺本 全一冊
懐中大冊 代

日用文章ハ是迄あまた数々ありといへども文雅俗の通用を兼たるハ少なく又上達の人も初学の人も便利よく年中用文の士農工商の用を備へず故に初学の輩とハいへども又役用年中を用に引出し書状の文章を初学とし四季をはじめとして時候の挨拶其外祝儀の部又男女の用文にいたる迄くはしく此書をはじめとして難用を集め又用文の言葉を集め便利よく文章の書様を記し其外なほ諸用を集め易く知るべし一紙に十分をこめ百余の通用を書加へ手習の手本として流行の文をも書加へ此書を以て学ぶ時ハ速に書状の達者となる事疑なし末代迄の重宝なれバ求め給ひて用ひ給ふべし

諸本類板元仕合
京都六角堂前
丁子屋源次郎